

演劇UNIT  
WAN-WAN  
BOTAN  
公演台本

# 「卒業」

「2025年度卒業生Ver」

脚本  
前原A僚太

☆CAST☆

サクちゃん…本名、大城桜（おおき さくら）。元北風高校演劇部部长。現在は受付嬢。

ミッチー…本名、三井優太（みつゐ ゆうた）。現在は警備員。

ローズ…本名、木下華奈（きのした かな）。現在は美家の八百屋、店員。

モリバー…本名、森下修平（もりした しゅうへい）。現在は居酒屋の店員。

ミヤザキ…本名、宮崎耕助（みやざき こうすけ）。現在は銀行員。

舞台は、北風高校演劇部部室。（木造の古びた内装であり、使われていない資料室を演劇部部室に改造した経緯がある。）部室奥側は手前側に比べ平台一枚分ほど高くなっている。下手側の段差部分には、お手製のスロープ。（音響卓を移動させるためにかつての部員が作ったもののように。）舞台上側の壁沿いに校舎廊下へ出る扉（すりガラスがはめ込まれており、扉の向こう側に人物がいるとうっすら舞台上から分かるようになっていす。）すぐ近くに照明スイッチ。舞台下手側の壁には教室にあるような窓。カーテンは開いており、夜の景色。うっすらと月明かりが差し込んでいる。

舞台奥側には、掃除用具入れ。ブロッコリーを模した奇妙な人形。本棚（かつての台本や演劇関係の本が詰まっている。）ホワイトボード。ホワイトボードの裏側には、演劇部らしく箱馬が置かれている。

舞台手前側の下手壁側に、キャスターの付いたラックがあり、CDやCDプレイヤー、サンプラーがしまっている。この演劇部における音響卓のようである。

部室全体にはいたるところに張り紙「遅刻厳禁」「お菓子持ち込み禁止」「あいさつは、おはようございます」などが貼ってある。中でも目を引くのが、舞台奥側の壁一面に貼られた「あめんぼのうた」の模造紙である。

現在、部室には夜の静けさが広がっている。しばらくすると扉の前に誰かがやってくる。「ガチャガチャ」と音を立て扉のノブが回されかかるが、カギがかかっているため扉は開かない。部室の外から声。

サクちゃん 「あー流石に閉まっているか。……ふむ。よいしょっと」

扉の前で、誰かが背伸びをする。どうやら上の方にある何かを取ろうとしている様子。

「ガチャ」と鍵を開ける音。部室に入ってくる女性、サクちゃん。

サクちゃん 「不用心だなー。鍵の場所、今も変わってないんだ」



「鍵も……（ノブが回るのを確認し）開いてるし、なんで？」

慌てて電気スイッチの元へ移動し、電気を消すサクちゃん。

それとほとんど同時に部屋へ入ってくる警備員の男、ミッチー。

電気が突然消えたことにびくつくも、決死の思いで照明スイッチの方に懐中電灯を向けるが間一髪でサクちゃんは光をかわす。その後光を上手にかわしながら、奇妙な人形のかげに身を隠すサクちゃん。

ミッチー 「……だ、誰ー。泥棒？ 強盗？ あ、いやそれはどっちも変わらないか。ぼ、僕は。つ、つ強いよー？ 体鍛えてるから、北高警

備室の吉田沙保里って僕のことだから。……観念してください。……誰ですかー？ ……誰、であってます……よね？ ……確か  
にこの学校昔から出るとか出ないとか噂あったもんな。勘弁してよお。……この仕事今日で終わりなのに、最後の最後でさあ」

人形のかげで物音を立ててしまうサクちゃん。人形に懐中電灯を向けるミッチー。

ミッチー 「……えー？ まさかお前が犯人だったの？ 最後だからちよっとはしゃいでみたみたいなの？ ……いや、何言ってるんだろ僕。人形にはしゃぐも何もあるわけじゃないじゃんね。誰もいなさそうだし、戸締りしたつもりになってただけか。疲れがでたかな」

ミッチー、部屋を出ようとするが、ブロリンの方を振り返り

ミッチー 「騒がしくしちゃってごめんね、ブロリン。それじゃ」

サクちゃん 「そうだよ！ ブロリン！ ブロリンだ！ 野菜の国の強欲な王様、ブロッコリー大王！ 通称ブロリン！」

ミッチー 「ええー？」

サクちゃん 「あ」

勢いあまって立ち上がるが、すぐに人形、ブロリンのかげに隠れるサクちゃん。

ミッチー 「え、何、今の。お前が喋ったの？」

サクちゃん 「げ、幻聴じゃないかな？」

ミッチー 「ううん。幻聴じゃないかな？ って絶対言ってる。これ、どういふこと？」



サクちゃん 「ぬわーはっはっは。ごまかしが利かぬなら仕方あるまいて。イカにもタコにも。わしが野菜の国の強欲な王様、ブロッコリー大

王、ブロリンじゃあ！」

ミッチー 「なんで喋れるの？ 人形でしょ？」

サクちゃん 「貴様はたわけか、たわしか」

ミッチー 「その2択なら、たわけかなあ」

サクちゃん 「わしは強欲な王様。たとえこの身が人形だとしても、喋りたければ喋るのだあ。どんな手を使ってもなあ！ ぬわーはっはっは」

ミッチー 「あのね。親として言わせてもらうけど、もうちよつと謙虚じゃないと自分がしんどいよー」

サクちゃん 「親？」

ミッチー 「そうだよ。お前は10年前、僕が作ったんだよ。僕がつていうか僕とみんなで。お前は、僕たち北高演劇部の小道具だったんだ」

サクちゃん 「……名前は？」

ミッチー 「あ、僕？ 三井優太。皆からはミッチーって呼ばれてた」

サクちゃん 「ミッチー……」

ミッチー 「そう！ ミッチー。ビビりのミッチーなんて呼ばれてさ。覚えてる？」

サクちゃん 「覚えてる。覚えてるよ。ミッチー」

立ち上がり、姿を現すサクちゃん。

ミッチー 「うわあ。ブロリンが……女の人になった。強欲が過ぎるよ。ブロリン」

サクちゃん 「違つて。ミッチー、電気つけてみ？」

言われるがままに電気をつけるミッチー。部屋に明かりがともる。

サクちゃん 「どう？ わかる？」

ミッチー 「ええっ！」

サクちゃん 「大城桜です。……イエーイ」

ミッチー 「……さ、さ、さ、サクちゃん！？」

サクちゃん 「そうだよ。久しぶり」

ミッチー 「久しぶり。10年ぶりかなあ」

サクちゃん 「変わってないね。ミッチー」

ミッチー 「サクちゃんは大人っぽくなったねえ」

サクちゃん 「そりゃまあ、28だし」

ミッチー 「でも、なんでここに？」

サクちゃん 「廃校になっちゃうんだってね。ここ」

ミッチー 「うん。今日の卒業式で廃校になっちゃった。生徒がなかなか集まらなくなってたんだってさ」

サクちゃん 「らしいね。私その知らせ聞いてさー、この部室も取り壊されちゃうのかなあって。そしたらなんか来ちゃった」

ミッチー 「そっか。なんとなくわかるよ。楽しかったもんねえ」

サクちゃん 「不思議だよ。お芝居のことなんてすっかり忘れてたのにさ。さっきなんてテンション上がっちゃってジュリエットやっちゃったよ。年も忘れてさ」

ミッチー 「君の小鳥になりたい」

サクちゃん 「そうしてあげたい。でも可愛がりすぎて殺しちゃうわ」

サク・ミチ 「ぶはははは」

サクちゃん 「あー恥ずかしい」

ミッチー 「ほんとに。ロミジュリのお芝居なんて一回もしたことないのにさ」

サクちゃん 「えー。演劇部なんだ！すごいーじゃああれやってよ！ロミジュリー」

ミッチー 「そうそれ！ いろんな人から言われるもんだから、結局ロミジュリごっこが流行っちゃって」

サクちゃん 「そうそう。いやー。懐かしいなあ」

そこに扉の外に人影が現れ、そのままラフな格好をした男、モリバーが入ってくる。

モリバー 「あれー、なんでこの部屋だけ電気ついてんだー？」

サク・ミチ 「えー？」

慌ててブロリンの陰に隠れるサクちゃん、ミッチー。モリバーは二人の姿をはっきりは確認しないが誰かがいることには気が付く。



モリバー  
「つておほほ。ウケるー。なんも変わってねー。……ん？ おーい、今そこに隠れたの誰だー？」

サク・ミチ  
「……」

モリバー  
「ははは。ウケるー。こんなところにも泥棒はいるんだなー」

ミッチー  
「あれ僕、泥棒に泥棒扱いされてる？」

サクちゃん  
「ていうか、なんでミッチーまで一緒に隠れてるの？ 警備員でしょ」

ミッチー  
「そうなんだけど、責任感よりびつくりと怖いが勝っちゃった」

サクちゃん

モリバー

「言つとくけどさー、この部屋ガラタしかねーよ？ どうせ忍び込むなら職員室とか校長室とかの方が。あ、俺。校内案内しようか？」

ミッチー

「ねえ。この泥棒、フランク過ぎてめちゃくちゃ怖いんだけど？」

モリバー

「とりあえずそこから出て来てさ。ちよっと駄弁ろうぜ」

ミッチー

「ほらー。駄弁ろうとか言ってる」

サクちゃん

「確かに怖いけど。……でもなんか懐かしい感じしない？」

ミッチー

「え？」

そこに扉の外に人影が現れ、そのまま、気の強そうな女性、ローズが入ってくる。

ローズ

「ちよっと！ モリバーー！」

モリバー

「おおローズ、遅いぜ」

ローズ

「おおローズじゃないわよ」

モリバー

「いや、お前ローズだろ。何言ってるんだ？ ウケるー」

ローズ

「そういう話してんじゃないことくらい分かるでしょ」

サクちゃん

「ねえ、私の聞き間違いじゃ」

ミッチー

「ないと思う」

サクちゃん

「じゃあそこにいるのって」

ミッチー

「モリバーと」

サクちゃん

「ローズ？」

恐る恐る、顔を出しモリバーとローズを確認するミッチーとサクちゃん

ローズ 「全く。電気ついてるから諦めて帰ろって言ったのに、なんで突撃してんのよ」

モリバー 「暇だったんだよ。お前のうんこが長いから」

ローズ 「大の大人がうんこ言うな」

モリバー 「うんこはうんこだろ？」

ミッチー 「間違いない。あの二人だよ」

サクちゃん 「変わってないね。見た目も夫婦漫才も」

モリバー 「あ、そんなことより、ローズ聞いてくれよ。超ウケるの」

ローズ 「どうでもいいけど、そのウケるって口癖治したら？ 馬鹿がバレルよ」

モリバー 「いや俺、これでもちゃんと風邪ひくんだけ？」

ローズ 「で？ 何が超ウケるの？」

モリバー 「そうそう、今そこにさ。生の泥棒がいるんだよ」

ローズ 「…は？」

モリバー 「俺泥棒見るの初めてだからテンション上がっちゃって。ちょっと駄弁ろうぜって言うてんのになんか出てこなくてさ」

ローズ 「待って！ 待って！」

モリバー 「なんだよ」

ローズ 「今そこに人がいるの？」

モリバー 「うん。多分2人」

ローズ 「やばいじゃん。早く出るよ」

ローズ、モリバーを引っ張って出ていこうとする

モリバー 「何がやばいんだよ。折角だし駄弁っていいぞ」

ローズ 「何がって、だって深夜の学校に忍び込んでる不審者なんだよ？」

モリバー 「いや、ブーメラン」





ローズ 「それはそうだけどそうじゃないじゃん。凶器とか持ってたらぶっするわけ？」

モリバー 「凶器？」

ローズ 「そう。持ってたっておかしくないんだよ。…バットとか…ナイフとか」

モリバー 「…拳銃とか？」

ローズ 「…あり得なくはないかも」

モリバー 「…この状況、ヤバくね？」

ローズ 「だからそう言ってるじゃん」

恐怖心が強くなっていくモリバーとローズ

ミッチー 「あのさー」

モリ・ロー 「うわあああ」

突然の声かけにたまらず座り込むモリバーとローズ

モリバー 「ダメだあ。終わったあ。撃たれるー」

ローズ 「だから言っただのにバカバー」

モリバー 「ごめーん」

ミッチー 「ちよつと。落ち着いて落ち着いて」

サクちゃん 「凶器持ってないよー。撃たないよー」

モリ・ロー 「え？」

サクちゃん 「ほら。2人ともこっち向いてー」

モリバー、ローズ恐る恐る振り返り、ミッチー、サクちゃんとご対面

サクちゃん 「だーれだ？」

ローズ 「え？ ええええ？ 嘘——！！サクちゃんー？」

サクちゃん

「正解！」

モリベ―

「ははは、マジかよ」

ミッチー

「すごいや。ほんとにモリベ―とローズだ」

モリベ―

「おいおい。泣くことはないだろ」

ミッチー

「だつてさー」

モリベ―

「ビビりのミッチー、泣き虫ミッチー。変わってねーな」

サクちゃん

「こんなの、ミッチーじゃなくなつて泣いちゃうよ」

ローズ

「サクちゃん、ミッチー久しぶり。ここにいる理由は同じかな？」

サクちゃん

「多分ね。ここが廃校になつちゃうつて話聞いて」

ローズ

「ああ、あの部室もなくなつちゃうのかあつて考えて」

サク・ロー

「気がついたらここに！」

サクちゃん

「うれしいなあ」

ローズ

「そうだ、聞いてよ。私が学校まで行つたらさ、校門のところで行つたり来たりしてる不審者がいてさ。怖いなーどうしようかなつて思つてただけど、よくみたらその不審者モリベ―だったの！ 勢いで学校まで来たはいいけど急に怖くなって、忍び込むかどうか悩んでたんだつてさー。傑作」

モリベ―

「それバラすなよ」

ミッチー

「じゃあ校門でたまたま会つたんだ？ 変だと思つたよ。2人が一緒に来るなんてさ」

モリベ―

「来るわけねーだろ。そういうミッチーはサクちゃんと来たんじゃねえのか？」

ミッチー

「僕はここで警備員やつてるんだ。廃校になつちやつたから今日で終わりだけど」

ローズ

「へー。あのミッチーが警備員！ 言われてみたら体男らしくなったね。多少は」

サクちゃん

「昔は棒だったもんね。棒」

ミッチー

「うるさいなあ」

ローズ

「10年たてば変わるよね」

モリベ―

「口うるさいまんまのやつもいるけどな」

ローズ

「はー？ ずーっとバカ丸出しの人に言われたくないけど」

モリベ―

「だからー。俺はこれでも風邪をひくんだつて！」

ミッチー

「モリベ―がバカじゃない根拠。それだけなんだ」



モリバー 「そうだよ。俺は風邪ひくたびにちよつと安心してんだから」

ミッチー 「それって、自分でもバカかもなーって思ってるって事にならない？」

モリバー 「……なるな」

サクちゃん 「じゃ、自他ともに認めるおバカキャラってことで」

モリバー 「ひでーな」

ローズ 「にしてももうちょい賢くなるべきだけだねー。10年何してたんだって感じ」

モリバー 「お、なめんなよ。数多の職を渡り歩き、経験と人脈を築きあげ続けた、語るも涙の10年間」

サクちゃん 「へー、凄そう」

ローズ 「仕事長続きせずにコロコロバイト変えてたっただけの話でしょ」

モリバー 「あ。知りもしないのに決めつけるのやめろよな」

ローズ 「へー。違うんだ」

モリバー 「そういうお前はどうかんだよ？」

ローズ 「あ。話そらした」

モリバー 「お前も今話そらしたよな？」

ローズ 「そらしてないし。その様子じゃいまだに彼女いなさそうだね。かわいそうー」

モリバー 「人が気にしていること言いやがったな。そっちがその気ならこっちだつてなー」

ミッチー 「あわわわ、ストップストップ。もうほんと昔から二人は犬猿の仲っていうか。モンタギューとキュピレットっていうか。すぐケ

ンカするんだから」

サクちゃん 「わかってないなあミッチー」

ミッチー 「え？」

サクちゃん 「2人は、モンタギューとキュピレットでもロミオとジュリエットだから」

ミ・モ・ロ 「はあ！どこがー！」

サクちゃん 「どこがって言われてもね」

ローズ 「ちよつと。サクちゃんーん」

「ローズの小鳥になんてなってみろ、両羽ちぎられてホルマリン漬けの刑だ」

「違う」

「ちよつと。ミチバーー！」

ミチ・モリ  
「混ぜんなよ！（混ぜないでよ！）」

サクちゃん  
「あつははは。なんか昔にタイムスリップしたみたい……。バカみたいな掛け合いしてさ。楽しかったよねえ。1年生の時に1から演劇部作ってー」

ミッチー  
「本当に出だしから大変だったよねえ」

サクちゃん  
「うん。部員探すのに学校中駆け回って、声かけまくって」

ミッチー  
「部員が揃ったと思ったら、今度は部室探し」

ローズ  
「意外と声出しできるような場所がなくて困ったねー」

モリベ  
「外は運動部が使うし、教室に小道具とか大道具とかをずっと置いとくわけにもいかなーし」

ミッチー  
「結局使っていない資料室使わせてもらうことになったけど」

サクちゃん  
「いらないもの山積み。ほこりも山積み」

ローズ  
「そうそう。結局、掃除に二週間くらいかかったよね」

サクちゃん  
「かかったー」

モリベ  
「その掃除の時と言えばよー。このスロープだよ」

ミッチー  
「あー大変だったよね。この段差のところが不便だからって男子三人で作ることになったはいいけど」

モリベ  
「まーミヤザキが細かくってよ。ここの傾斜角度があと少しどうこうとか」

ミッチー  
「ただでさえ工具なんて使い慣れてないのに、何回も作り直しさせられたっけ」

ローズ  
「そうだったんだ。あんまり覚えてないけど」

サクちゃん  
「ミヤザキ君ならやりそうだ」

ミッチー  
「話してたらミヤザキにも会いたくなってきたねー」

ドアを恐る恐る開けて入ってくるスーツの男、ミヤザキ。誰も気が付かない。

モリベ  
「あ、そっか。俺らの代は、あとミヤザキだけか」

サクちゃん  
「ミヤザキ君、来るかな」

ミッチー  
「来てくれたらいいねえ」

サクちゃん  
「だね。なんてったって北高演劇部創部メンバーなんだし。部室最後の日にもし皆揃ったら最高だよ」

ローズ  
「それ、超エモい」



モリベール 「いやー、でもなあ。あいつ冷たいからなあ。冷血漢ミヤザキ」  
ミチ・サロ 「あー」

ミヤザキ、静かにシヨックを受けている

ローズ 「まあ確かに、なんか一歩引いてみるところはあったよね」

モリベール 「俺たちを見下してるんだよ。あいつは何でもできるから」

ミッチー 「まあミヤザキが、廃校のニュース聞いて、部室まで来るかって言われると」

サクちゃん 「ちよっと想像できないかもね」

モリベール 「だよなー」

ミチ・ロー 「確かにねー」

ミヤザキ 「……なるほど。俺は来ない方がよかったんだな」

一同一斉に振り向き、ミヤザキに気が付く。

サ・ミ・ロ・モ 「えー？ うわああああああミヤザキ（くん）ー？」

ミヤザキ 「いくら何でも、悲鳴を上げることはないじゃないか」

ミッチー 「いやいや、今のは歓声だよー」

サクちゃん 「そうそう！ ミヤザキ君来るかなーって言ってたらほんとにいるからー」

ミヤザキ 「いいんだ。俺は冷たくて部室に来るのはちよっと想像できないんだろ」

ミッチー 「いやいや、誤解だよ」

ミヤザキ 「誤解なもんか。冷血漢ミヤザキ。なんだもんな」

モリベール 「誰だよ。そんなひでえこと言うのは。許せねえなーミヤザキ」

ミヤザキ 「お前だろー！」

モリベール 「悪い」

ミッチー 「でもミヤザキ！ 本当に会えてうれしいよ」

ミヤザキ 「あー、寄るな寄るな。そもそもお前らなんでここにいるんだ？」

サ・ミ・ロ・モ

ミヤザキ

サクちゃん

ミヤザキ

ミッチー

ミヤザキ

ローズ

ミヤザキ

モリバー

ミッチー

ミヤザキ

モリバー

ミヤザキ

サ・ミ・ロ・モ

ミヤザキ

サクちゃん

ミヤザキ

ローズ

ミヤザキ

ミッチー

ミヤザキ

モリバー

ミヤザキ

ミッチー

ミヤザキ

ローズ

「え？」

「部長のサクちゃん。だよな？」

「うん。そうだよ、変わってないでしょ」

「ミッチー。ビビリのミッチー」

「そうそう。今は警備員やってるんだ」

「ローズ。超スーパ―努力人間ローズ」

「待つてそれ何！？ アタシのことそんな風に呼んでたの？」

「で。お前誰だっけ」

「なんでだよ！ 俺だけ忘れてるのは不自然だろ」

「モリバーだよ。森下修平。略してモリバー」

「ああ。バカの奴か」

「せめて名前は呼んでくれよ」

「お前ら、もしかして死んだのか？」

「はい？」

「そうでもなさや部員全員がいることに説明がつかないもんな」

「そんなことはないんじゃないかな」

「一番現実的なのは俺が幻覚を見ているという線だが、それにしてもはつきり見えすぎている。だからこれは現実だ」

「そうそう。合ってる合ってる。現実だよ」

「だが実際のあいづらがこの部屋にたまたま来るか？ 同じ日の同じ時間に？ いいや。そんな非化学的なことはあり得ない。可能性から排除するべきだ」

「確かに信じがたい話だけど、実際に起こったんだよ」

「つまりお前らは、死んで化けて出てきている」

「それが一番非化学的だろ！？」

「演劇部時代、強く当たってきた俺に対する復讐。そういうことだな」

「違うよ。なんでそうなるのー？」

「筋道立てて考えるとそういう結論になる」

「どう筋道が立ってんのよ！？」



サクちゃん

「あのね。ミヤザキ君？」

ミヤザキ

「いいからお前ら。生きている間に俺に勝てないからといって死後の力を使うのはいかなものかな。言っておくがそんなことをしても俺に勝つたことにはならないぞ。わざわざ化けて出たのにやっぱり俺には勝てなかったと惨めな想いをするのはお前たちだ。悪いことは言わない。早く成仏しろ。今なら見逃してやる」

ローズ

「……さすがミヤザキ」

サクちゃん

「こんなに怯えてるのに」

ミッチー

「絶対に崩さないプライド」

モリバー

「よ！ お見事！」

拍手する四人

ミヤザキ

「ええい！ 茶化すな。俺にはこの世に怖いものなんて一切ないが、あの世のものはダメだ。オバケはダメなんだ。いいか！ 俺に文句があるなら生きて出直してこい！」

ローズ

「うわー。10年ぶりのミヤザキ節だ」

ミッチー

「この感じ、懐かしいな」

サクちゃん

「流石にちょっとかわいそうになってきたけど」

ミヤザキ

「なんだ！ ボソボソコソコソと。呪詛か、呪詛なのか」

モリバー

「ウケるー。呪詛とか言っただけだ」

ミチ・ロー

「モリバーー！」

モリバー

「はいはい」

サクちゃん

「あのね。ミヤザキ君？ 私たち生きてるよ？」

ミヤザキ

「騙されないぞ」

サクちゃん

「ほら足！ みんな足あるよ！」

ミヤザキ

「……ない」

サクちゃん

「あるよー！ あ、じゃあ。足つきあめんぼの歌！ いくよみんな！」

モリバー

「ええ、マジで？」

サクちゃん

「せーのっ」

サクちゃん、ローズ、ミッチー、モリバー、ジャンプスクワットしながら、あめんぼの歌。

サクちゃん 「ほら！ 足音聞こえるでしょ！ みんな生きてる！」

しばらく、足つきあめんぼの歌を眺め、部室の外へ出るミヤザキ。一同、顔を見合わせあめんぼの歌をやめる。ドアが開きミヤザキが戻ってくる。

ミヤザキ

「いやー懐かしいなあ。この部室。10年も経つていうのにほとんど変わってない。この音響卓（サンプラ）を試しに鳴らしてみ  
る）まだ現役なのか。音なんてもう骨董品だぞ。このスロープも頑張って作ったなあ。おお。なんだ、ブロリンまで残っているの  
か。はっはっは。おや？ 驚いたな。お前らも来てたのか。サクちゃん。ミッチー。ローズ。モリバー。久しぶり」

サ・ミ・ロ・モ

「さつきのなかったことにしてる！」

ミヤザキ

「さつきのこと？ 何のことだ？ おれは今来たばかりだ」

サ・ミ・ロ・モ

「完全に過去をもみ消してる！」

ミヤザキ

「どうした、お前ら。変な顔して。座ったらどうだ？」

ローズ

「さすがミヤザキ」

サクちゃん

「あれだけ取り乱したのに」

ミッチー

「絶対に崩さないプライド」

モリバー

「よ！ お見事！」

4人拍手する。

サクちゃん

「ホントに全員揃っちゃったね」

ローズ

「部室も全然変わってないし」

モリバー

「むしろ変わらなすぎだろ」

ミヤザキ

「ミッチー、今ここの演劇部ってどんな感じなんだ。ここの警備員なんだろう？」

ミッチー

「ああうん、会員の子から聞いた感じだと」

ミヤザキ

「会員？」





ミッチー 「そうそう。人数少なくなっちゃって、今は演劇部じゃなくて演劇同好会」

モリバー 「寂しいなそれ」

ミヤザキ 「だから演劇部の垂れ幕がなかったのか」

サクちゃん 「え？」

ミヤザキ 「その辺にみんなで作ったやつかけてただろ？ いらない服持ち寄って作った」

ローズ 「ああ！ あったあった」

サクちゃん 「部じゃなくなっちゃったから垂れ幕捨てちゃったのかなー」

モリバー 「もう演劇部じゃねーんだもんな」

ミッチー 「僕らが卒業してから、部員は減る一方で、コンクールとかもままならなかったみたいだよ」

ミヤザキ 「そもそも、俺たちの後ろの代からして人数足りなかっただろ」

サクちゃん 「でも演劇やりたいって子がゼロじゃないってことだよ。同好会があるってことはさ、それは嬉しいな」

ローズ 「同好会がなかったらこの部室も残ってなかっただろうし」

ミッチー 「こうしてみんなが集まることもなかったかもしれない」

サクちゃん 「感謝感謝！」

5人 「ありがたやーありがたやー」

5人 おかしくなって笑い出す

モリバー 「なあ、みんな揃ったんだしよ。なんかやろーぜ」

ローズ 「なんかって何よ」

モリバー 「なんかあったらなんかだよ。演劇部っぽいやつ」

サクちゃん 「基礎練の前にやってた、体あつたためのゲームとか！」

モリバー 「そうそういの」

ミッチー 「サクちゃん冴えてる！」

モリバー 「冴えてるのは俺だっつーの」

ローズ 「ゲームどんなのやってたっけ？」

サクちゃん 「いっぱいやったからねー」

ミッチー 「当時の僕たちが盛り上がって、演劇部っばいやっ…」

ミヤザキ 「演劇部式だるまさんが転んだ」

サ・ミ・ロ・モ 「それだ！」

サクちゃん 「じゃあ私、鬼」

5人散らばり、だるまさんが転んだのポジションにつく(サクちゃんが舞台下手手前音響卓のそば。4人は舞台奥に1列に並び)

サクちゃん 「ちゃんとルール覚えてるー？」

ローズ 「大丈夫ー」

サクちゃん 「それっぽくなかったらすぐアウトだからね」

ミッチー 「いいから、はやくー」

サクちゃん 「わかったってば。じゃあいくよー」

宮・ミ・ロ 「よっしゃー！」

サクちゃん 「だーるまさんーがー」

雰囲気が変わり4人が真剣にゆーつくりと、サクちゃんに近づく。

サクちゃん 「犬になった！」

4人、犬のモノマネ。若干照れが見える。

サクちゃん 「ちよっとー。みんな照れてませんか？ 芝居中の照れはー？」

宮・ミ・ロ 「一生の恥！」

サクちゃん 「その通り」

4人、本気の犬になる。「わおーん」「はっはっはっ」「くーんくーん」「グルルツワウツワウツ」犬の鳴き声であふれかえる。おなかを見せる犬。ケンカする犬。マーキングする犬。マーキングのにおいをかぐ犬。それぞれの犬が横行する。大笑いのサクちゃん。



サクちゃん 「オッケー！ みんなクリア！」

サクちゃんがサンプルを操作。正解のようなSE。4人は満足気。

サクちゃん 「次いくよ！ だーるまさーんがー」

再び雰囲気が変わり4人が真剣にゆーっくりとサクちゃんに近づく

サクちゃん 「料理をした」

4人一斉にそれぞれの料理に移る

モリベー 「お母さんお母さん、僕も手伝う」

ローズ 「いいわよ。じゃあニャンニャンの手にしてー」

モリベー 「ニャンニャンの手にしてー」

ローズ 「包丁とととととんっ」

モリベー 「包丁だだだだだんっ」

ローズ 「できたねー」

サクちゃん 「いいねいいね、協力プレーだ。クリア！」

サクちゃんがサンプルを操作。正解のSE。モリベー、ローズがハイタッチ

モリベー 「おっしゃ」

サクちゃん 「ミヤザキ君は」

ミヤザキ 「フランベ」

ミヤザキ、料理がプロのそれ。

サクちゃん 「おープロだね」

ミヤザキ 「客がおれの料理を待ってるからな」

サクちゃん 「はい。クリアと」

サクちゃんがサンプラを操作。正解のSE。ミヤザキ、小さくガッツポーズ

サクちゃん 「で？ スルーしてたけどミッチー？」

ミッチー 「んー？」

サクちゃん 「何してるの？」

ミッチー 「カップラーメン待ってる間の舞い！ きっかり3分」

サクちゃん 「……」

ミッチー 「だめ？ ただ3分待つよりこう踊った後の方がおいしく感じるんだよ。つまり隠し味であって、歴とした料理と言っても過言では」

サクちゃん 「ミッチー！ アウトー！」

サクちゃんがサンプラを操作。不正解のSE

宮・モ・ロ 「Booooー」

ミッチー 「えー！」

サクちゃん 「カップ麺は料理じゃない」

ミッチー 「美味しいのに」

ロース 「ちゃんと食べろっ」

ミッチー 「はい」

サクちゃん 「じゃあ行くよ！ だーるまさーんがー」

誰かがサクちゃんをタッチ。捕まっていたミッチーを含め全員走り出す。すかさず。



サクちゃん「ストップ！」

4人「おーにさんこーちら」

サクちゃん「はーじめーの第一歩。はいタッチ」

ミッチー「まあそうなるよね」

サクちゃん「じゃあ次、ミッチー鬼ね」

宮・モ・ロ「FOOOO！」

ミッチー「ねえこんなノリだっけ？」

サクちゃん「はやくー」

ミッチー「ま、いつか。いくよー。だーるまざーんがー」

4人ミッチーに近づいていく

ミッチー「事件を起こした！」

モリバー「インペリアル・ステート・クラウン確かに頂戴したぜ」

ミヤザキ「盗んだ方がいいが無事帰れると思うのか。うちのセキュリティは手強いぞ。行きはよいよい帰りは怖い。どうぞ命をお気をつけて」

モリバー「ご忠告いただき感謝感激雨あられ。だけでも心配はご無用だぜ。それより手強い相棒が俺にはついてるからよ」

ミヤザキ「無駄だ。すでにこの部屋はダイヤモンドを駆使した強固な壁で包囲されている」

ローズ「ジャキンッ」ふっ。またつまらぬものを斬ってしまった」

ミヤザキ「なにい」

モリバー「五右衛門、とんずらだー」

モリバー、ローズ部屋から出ていく

ミッチー「出て行っちゃったよ」

サクちゃん「おい！ 今ここにおれが来なかったか！？」

ミッチー「ええ！？ き、来たかな？」

サクちゃん 「バカ者！ そいつがルパンだー！」

サクちゃんも出ていく。

ミッチー 「だるまさんは？」

ミヤザキ 「あいつら本当に28かよ」

ミッチー 「元氣ありすぎだね」

ミヤザキ 「俺はもう限界だ。歳甲斐なくはしゃいで疲れたよ」

ミッチー 「ミヤザキは今何してるの？」

ミヤザキ 「ん？」

ミッチー 「仕事。ストレートで難関行ったところまでしか知らないからさ」

ミヤザキ 「ああ。銀行員。院まで行ってそのまま」

ミッチー 「ほんとにエリートなんだね。じゃあ金持ちだ」

ミヤザキ 「ま、不自由はしてないな」

ミッチー 「やっぱミヤザキはかっこいいな」

モリバー、部屋に入ってきたながら

モリバー 「おいお前ら！」

ミッチー 「おかえり。あれ？ モリバーだけ？」

ミヤザキ 「五右衛門とつつあんはどうした？」

モリバー 「男子トークするぞ！ 男子トークだ。男子トーク」

ミッチー 「どうしたの急に」

ミヤザキ 「大方、モリバー！ 今から二人で女子トークだから先帰つといてー。とか言われたんだろ」

モリバー 「なーにが女子トークだよ。なー」

ミッチー 「あ、正解なんだ。流石ミヤザキ」

ミヤザキ 「で、男子トークって何話すんだ？」



モリベ― 「そりやお前、恋バナしかねーだろ」

ミッチー 「恋バナって」

ミヤザキ 「今更大した話題にならないだろ」

モリベ― 「それでもやるんだよ。まあでも確かに普通に話しても盛り上がらねーか」

ミッチー 「じゃあどうすんの？」

モリベ― 「お題。修学旅行、2日目、男子部屋、夜。はい！」

モリベ― が手を叩くと、3人は床に仰向けになり横並び。

モリベ― 「お前らもう寝たー？」

ミッチー 「まだーなんか寝れなーい」

モリベ― 「ミヤザキはー？」

ミヤザキ 「寝てないけど」

モリベ―、バツとうつ伏せになる。

モリベ― 「じゃあさ。ちょっと話そうぜ？ ぶっちゃけトークな」

ミッチー 「オッケー。嘘禁止だからねー」(ミッチーうつ伏せに)

ミヤザキ 「いいけど、口外するなよ」

モリベ― 「つたりめーだろ。じゃあ聞くけどよー。今付き合ってる奴とかいたりするー？ミッチーどうだよ？」

ミッチー 「えーっと、僕はー」

モリ・ミヤ 「うん」

ミッチー 「いるー」

モリベ― 「マジかよー？」

ミヤザキ 「付き合ってどれくらいなんだ？」

ミッチー 「あー、ごめん。嘘。いないー。いるって言いたーい」

モリベ― 「つたく焦らせんよ」

ミヤザキ 「そう言うモリバーはどうなんだー？」

モリバー 「お、俺かー？ 俺の話聞きたいか？」

ミッチー 「聞きたい聞きたい」

ミヤザキ 「焦らすなよ」

モリバー 「俺に彼女は、いー」

ミヤザキ 「ないんだろどうせ」

モリバー 「決めつけんなよ」

ミッチー 「じゃあいるの？」

モリバー 「いねーけどー。っーかさー付き合ったりするのとかあ、ダサくなあーい？」

ミッチー 「あ、僕もそれ思ってたー。なんか目先しか見てない感じるよね」

モリバー 「そうそう。俺はもつと大局を見てるって言うかさー」

ミッチー 「わかる。僕も大局をみてる派ー」

ミヤザキ 「ふーん」

ミッチー 「あ。その感じミヤザキ彼女いるやつだ」

ミヤザキ 「そりゃあ、いるに決まってるだろ」

モリバー 「かーっ。俺も言ってみたいぜ。『そりゃあ、いるに決まってるんだろ』」

ミヤザキ 「でもお前ら二人は別に羨ましくないんだろ。大局を見てるんだもんな」

モリバー 「羨ましいに決まってるんだろ。バーカ」

ミッチー 「そうだよ。バーカ」

モリバー 「つかさ、この年になると恋愛のハードル滅茶苦茶高くな？」

ミッチー 「わかる。そもそも出会いがないし」

モリバー 「そうそう」

ミヤザキ 「マチアプとかは？」

ミチ・モリ 「あれは会えない」

ミヤザキ 「やってはみたんだな」

モリバー 「学生時代にもまともな恋愛できなかった奴には、正直無理ゲーだ」

ミッチー 「モリバーと一緒にするのは気になるけど正直分かる」





ミヤザキ

「ふーん。そういうものか」

モリバー

「あー、全然共感してねー奴いるぞー」

ミッチー

「ねー」

ミヤザキ

「悪い」

ミッチー

「素直に謝らないで。余計傷つく」

モリバー

「で、ミヤザキはその彼女とはなげーのか？」

ミヤザキ

「まあ、5年くらいか」

ミッチー

「5年！」

モリバー

「結婚は？」

ミヤザキ

「そういう話も出ている」

ミッチー

「マイホームは？」

ミヤザキ

「貯金はある」

ミチ・モリ

「だつはー！」

モリバー

「なんだよー順風満帆、絵にかいたような人生かよ」

ミヤザキ

「なあ？ 修学旅行」こはもうやらないのか？ 結構楽しかったんだけど」

ミッチー

「もうミヤザキとはやってあげないよ！」

モリバー

「つたく。勝手に大人になりやがってよ」

ミヤザキ

「なんだよ。もう28だし、別に普通だろ」

ミチ・モリ

「あつはー！」

モリバー

「俺たちも普通になりてーな、ミッチー」

ミッチー

「あーごめん。モリバー。やっぱり一緒にされるのは抵抗あるかも。僕はモリバーより全然可能性あると思う」

モリバー

「あー？ 結局サクちゃんに告白できなかった奴が何言ってるんだ」

ミッチー

「あ、いやそれはそれでまた別の話」

モリバー

「なんなら今日10年越しの想いぶつけてみるか」

ミッチー

「ちよつと待ってよモリバー。何言ってるのさ」

ミヤザキ

「ちよつと待つのはお前だ。ミッチー」

ミッチー

「なに、ミヤザキ」

ミヤザキ 「お前、サクちゃんに告白しなかったのか？」

モリバー 「渡せなかったんだってよ。第2ボタン」

ミヤザキ 「なんでだ」

ミッチー 「風が強かったんだよ。ビュービューって。臆病風ってやつ？」

ミヤザキ 「……」

ミッチー 「ごめん」

ミヤザキ 「直れ」

ミッチー 「え？」

ミヤザキ 「いいから直れ！ 正座だ」

慌てて、正座をするミッチー。ミッチーを挟むモリバー、ミヤザキ

ミヤザキ 「俺たち結構相談に乗ってやったよな」

ミッチー 「そ、そうだったけ」

モリバー 「そうだけ。1年の時からずっと」

ミッチー 「あ、ありがとね」

ミヤザキ 「サクちゃんとお前の出会いからサクちゃんが最近ハマってる女優の名前まで」

モリバー 「2人で観に行ったお芝居の内容から、昨晚食べたおかずまで」

ミヤザキ 「俺たち、サクちゃんのこと何でも知ってたんだぞ。お前のせいで」

「よ、よかったじゃない。友達のこと知れて」

「ミヤザキお前さ、そのせいで彼女と別れたことあったよな？」

「え、そんなことがあったの？」

「ミヤザキ君、大城さんのこと詳しいよね？」

「大城さん？ ああサクちゃんか。別に普通だよ。同じ部活ってたけで」

「サクちゃん。ちゃんづけなんだ。彼女の私は苗字にさんづけなのに」

「いやいや。サクちゃんはサクちゃんってあだ名だから。第一お前だっておれのこと、ミヤザキ君じゃないか」

モリバー 「もういい。別れよ？さよなら」



ミヤザキ

ミッチー 「あははは。なにそれおかしい」

ミヤザキ 「お前のせいだろ」

モリベール 「小学校の頃からの幼馴染にずっと片思いしてたもなかなかねーから結構応援してたんだけどな」

ミヤザキ 「小学生の時に、サクちゃんが転校してきたんだったか」

モリベール 「そうそう、5年生の時。5年3組！」

ミッチー 「ちよ、ちよつとなんでクラスまで覚えてるの」

ミヤ・モリ 「……」

ミッチー 「僕が喋ったんだろうね。10年たっても覚えてられる程度には」

モリベール 「転校生に一目ぼれって。なんかいいよな」

ミヤザキ 「いや、確か一目ぼれじゃなかったはず」

モリベール 「あれ、そうだったけ」

「うん。一目ぼれとは違ったかな。もちろん可愛いなーとは思ってたけど。小学校の頃はお互いわいわいはしゃぐタイプでもなかったし、2人で話したりみたいなことはなかったかな」

「本格的に気になりだしたのは、中2の頃だって言ってたな」

「あー思い出した。確か生徒会がなんとかって」

「そうそう。中2の時サクちゃんが生徒会の選挙に出たんだよ。人一倍人見知りで人前で何かを発表するなんて一番苦手だったのだよ。女優を目指すんだから、これくらいこなしてこの性格変えるんだって言ってさ。がっちがちに緊張しながらスピーチしてて。そんな姿みてたらいつの間にか好きになってた」

「フー！」

「それで高校が上がって、サクちゃんが演劇部作るっていうもんだから」

「うん。この中の誰よりも早く演劇部員になってさ。お芝居のことなんてなんにも知らないのにね」

「なんかドラマみてーだよな」

「でも結局、告白しなかったんだよな」

「だからごめんって」

「とんだヘタレだよ。折角、脚本家ミヤザキ様と計画して、ああいう配役にしてもらったのになあ」

「え？ なにそれ」

ミッチー

モリベール

ミッチー

ミヤザキ

モリベール

ミヤザキ

ミッチー

モリベール

ミヤザキ

モリベール

ミッチー

ミヤザキ

モリベール

ミッチー

ミヤザキ

モリベール

ミッチー

ミヤザキ

モリベール

ミヤ・モリ

ミッチー

モリベール

ミヤザキ

モリベール

ミヤザキ

ミッチー

ミヤザキ

モリバー 「最後の本だよ最後の本。全国行ったやつ。結構なアシストだったと思うぜ」

ミッチー 「あの配役ってそういう意図があったの？」

ミヤザキ 「まあ、多少はな」

ミッチー 「気づかなかったな」

部室のドアが開き、サクちゃんローズが帰ってくる。

ローズ 「おーっす！ 野郎ども！ 盛り上がってるかー」

モリバー 「おせーぞ！ なに長話してんだよ」

ローズ 「女の子には女の子同士喋りたいことがいっぱいあるんだって」

モリバー 「なーに女の子だ。平成ガチババアがよ」

ローズ 「へー、そんなこと言うんだ」

モリバー 「その辺でラブ＆ベリーでもやってればー」

サクちゃん 「そういうこと言うなら、モリバーお酒なしね」

モリバー 「えー」

ミヤザキ 「お、酒か」

ローズ 「このメンバーでお酒、はじめてっしょ。コンビニ酒だけどさ」

ミッチー 「気が利くー！」

モリバー 「待って。俺も飲ませて」

ローズ 「えー、ムシキングでもやってればー？」

モリバー 「頼むぜー」

サクちゃん 「お、みんな結構いける口なんだね。はい、好きなのとってー」

モリバー 「お！ エビスあんじゃないエビス！ 俺これもーらい」

ローズ 「あ！ それアタシのー！」

ミヤザキ 「ちよつと待った！ エビスといったらおれだ」

サクちゃん 「私もエビスの気分になっちゃったなあ」

ミッチー 「じゃあ僕も」



ローズ 「ちよつと、ミッチー仕事中でしょ」

ミッチー 「あ、そっか。そうだった」

モリバー 「細かいこと言うなよ。無礼講だ。無礼講」

サクちゃん 「じゃ、久しぶりにあれ行きますか」

モリバー 「よしきた」

5人同時に、じゃんけんのいわゆる「見えるやつ」をやる。

サクちゃん 「演劇ジャンケン！」

ミ宮モロ 「演劇ジャンケン！」

サクちゃん 「グー（石のジェスチャー）」

ミ宮モロ 「チョキ（鉄のジェスチャー）」

サクちゃん 「パー（紙のジェスチャー）」

5人 「よよいのよい」

各々勢いよく、出した手のジェスチャーを行う。何度かあいこを挟みミヤザキが勝利する。アホみたいに喜ぶミヤザキ。皆の白い目。視線に気付き

ミヤザキ 「ま、デキル男はエビスって昔から決まってるだよ」

ローズ 「さすがミヤザキ」

サクちゃん 「あれだけ喜んだのに」

ミッチー 「絶対に崩さないプライド」

モリバー 「よ！ お見事！」

4人拍手する

ミヤザキ 「どうした？ お前ら。早く飲み物選べよ」

ローズ 「じゃあアタシはねー」

皆わいわいお酒を選びに行くが、モリバーはふと何か考えだす

ローズ 「ほいモリバー。あまりものー。どうしたの頭悪そうな顔して」

モリバー 「そういやさ、ローズ。お前なんでローズなの？」

ローズ 「は？ ロミジュリ？」

モリバー 「さっきあだ名の話がチラツと出たんだよ。サクちゃんはサクちゃんがあだ名だって。わかりやすいよな。大城桜でサクちゃん。他の奴らだって三井でミッチー。ミヤザキはミヤザキだし。おれだって名前縮めたただけだろ」

サクちゃん 「確かに。木下華菜でローズはよくわかんないね。なんでだっけ」

ミッチー 「ローズは気づいたらローズだったもんな」

ミヤザキ 「あれだ。ローズクイーン」

サ・ミ・モ 「それだー！」

ローズ 「そうそう！ 初舞台の時の役の名前。舞台終わっても定着しちゃって」

サクちゃん 「よく覚えてたね。ミヤザキ君」

ミヤザキ 「あの本書いたの俺だしな」

ミッチー 「そうだったそうだった！ 敏腕脚本家ミヤザキの初脚本」

サ・モ・ロ 「チュリップの大冒険」

モリバー 「いやー笑ったよな。こーんな難しい顔してるやつがさ、どーんな小難しい話書いてくるかと思ったら」

サクちゃん 「とびきりのラブファンタジー」

ローズ 「可愛いところあるじゃんってみんなで笑ってさ」

ミッチー 「どんな話だっけなあ。あ、あの時はモリバーが主人公だったよね」

サクちゃん 「お花の国の心優しい村人チュリップ」

モリバー 「え？ やんのか？ どんなだっけ？」

ミヤザキ 「毎朝花に水をあげるこの瞬間が」

ミヤザキの助け舟に乗り、ただたどしく芝居を始めるモリバー



モリバー 「あー。おつけおつけ。ゴホンッ。僕はさ、毎朝花に水をあげるこの瞬間が大好きなんだ。えー……」

ミヤザキ 「花に元気をあげると」

モリバー 「不思議とこっちも元気が出てくる。すると今日はいいことがおきるそんな気がしてくるんだ。こんな感じだったよな？」

サクちゃん 「モリバー？ どうしたー？ 照れが見えるぞー」

ローズ 「芝居中の照れは一生の恥」

ミッチー 「よ！ 大根役者！」

モリバー 「お前らな。芝居なんて何年ぶりだと思ってんだ」

ミヤザキ 「でも雰囲気はそんな感じだ。そしてある日、チュリップはお花の国の王女ローズと出会う」

ローズ 「見とけよモリバー」

ローズ、ガラスと雰囲気を変えお芝居を始める。

ローズ 「ふふっ。お城抜け出してきちゃった。お城の外は広いな」

ローズのお姫様ぶりに思わず吹き出すモリバー

ローズ 「何笑ってんの」

モリバー 「いやだって」

ミッチー 「芝居とめると後で怒られるぞー」

サクちゃん 「ほら、集中ー」

モリバー 「君、見かけない顔だな」

ローズ 「きゃっ！ 誰！？ 悪漢？」

モリバー 「ううん、僕はアッカンで名前じゃない。僕の名前はチュリップ」

ローズ 「そう。私はローズ。一応王女ってことになってるけど。お城がつまらなくて抜け出してきちゃった」

モリバー 「……なんだっけ？（無静音で尋ねる）」

ミヤザキ 「楽しいところたくさん」

モリバー 「じゃあ楽しいところたくさん案内してあげるよ」

ローズ 「ほんと！嬉しい！ありがとう」

ミッチー 「ローズすごいね！ セリフ完璧じゃん。全部覚えてるの？」

ローズ 「まさか。ニュアンスだけ。あとはほとんど即興」

ミッチー 「そうは見えなかったな」

ローズ 「誰かさんと違って照れてないだけ」

モリベー 「悔しいー」

サクちゃん 「すごいねすごいね。確かに細かい所は違うけどあの頃のお芝居がよみがえってきてる」

ミヤザキ 「こうして出会ったチュリップとローズはこっそり出かけることが多くなる。だけど」

音響車のそばにいたミヤザキが機械をいじると、BGMが流れ出す。

ミッチー 「お、BGMいいね」

サクちゃん 「待って。これって」

ミヤザキ 「ああ。当時実際に流したBGMだ。MDが残ってた」

モリ・ロー 「フー！ー」

ミヤザキ 「さ。サクちゃん。どうぞ」

サクちゃん、ブロリンのそばに移動し芝居を始める

サクちゃん 「皆の者、注目いたせ。ここにおわすは野菜の国の王、アレキサンドロス・ブロッコリー大王である。私は大臣のカリ・フラワーである」

ミッチー 「そうだそつだ。サクちゃんはブロリンとの悪役タッグだ」

サクちゃん 「どわっはは。花の国の諸君。隣国の鉄の国がここ花の国に戦争を仕掛けるとの情報が入った。武力をもたぬ花の国には滅びる未来しかないであろう。と王は申しております」

モリベー 「なんだって」

サクちゃん 「しかしこの野菜の国が助けてやろうではないか。わしは妻に先立たれて悲しみに暮れる毎日。どうだろう、その王女」

ローズ 「え」





サクちゃん 「私の妃となれ。さすればこの花の国の未来は保証する！と申しております」

ミッチー 「やっぱいいなあ、サクちゃんのブロリン」

モリバー 「ブロリンではないんだけどな」

ミヤザキ 「大王をやる役者が足りなかったんだからしょうがないだろう」

ローズ 「結果オーライ結果オーライ。私、人形のブロリン好きだよ」

ミヤザキ 「そして、決断を迫られたローズとその弟のシーンが入る」

ミヤザキ、音響卓を操作。BGMが鳴る。ミッチー、少し緊張している

ミッチー 「好きなのかい姉ちゃん？」

ローズ 「え？ どうしたの？ ラフレシア？」

ミッチー 「姉ちゃんの好きなのはブロッコリー大王じゃないでしょ？」

ローズ 「そうね。違うかもしれない。でも、国の幸せのため。未来のため。私は彼に嫁ぐの」

ミッチー 「姉ちゃんの幸せは？」

ローズ 「国の幸せが私の幸せ」

ミッチー 「そんな」

ローズ 「ありがとう。おやすみ、ラフレシア」

ミヤザキ 「国のため政略結婚を受け入れるローズ。うん。我ながらいい話だ」

ミッチー 「はー緊張した」

サクちゃん 「ミッチー、ナイスファイト」

モリバー 「で、鉄の国云々ってのは野菜の嘘だったんだよな。ブロリンがローズを妃にするための」

ミヤザキ 「ああ。そしてその事実を知ったラフレシアが頼ったのは」

ミヤザキ、音響卓を操作。BGMが鳴る。

ミッチー 「助けてくれ。チュリップ。姉さんを助けられるのはお前だけだ」

モリバー 「王子様、頭をあげて。僕は村人だ」

ミッチー 「王子じゃない。弟として姉を助けてくれって言っている。だから頭も下げる」  
モリバー 「わかった。喜んで。タケ！ 行くぞ」

掃除用具入れの近くに移動していたミヤザキ、箒を素早く取り出し構える

ミヤザキ 「やっと出番か。血が騒ぐ」

モリバー 「タケはこの村一の槍使い。力になる。いくぞー！」

ミ・ミヤ 「おうー！」

サクちゃん 「わー！ 盛り上がって来たね。いよいよクライマックスだ」

ローズ 「みんなが助けに来てくれたのを聞いて、ローズはうれしいんだけど、ここで彼らの手を握ると」

ミヤザキ 「野菜の国がたちまち花の国を亡ぼす」

ローズ 「だから突っ放すんだ。心を鬼にしてなるの、冷酷なローズクイーンに」

ミヤザキ、音響を操作。BGM。

モリバー 「ローズ今なんて？」

ローズ 「聞こえなかった？ 帰れって言ったの。もう私はこの国の女王。あなたたちへの情などとうになくなった」

モリバー 「タケもラフレシアもここまではこれなかったけど君のために戦ったんだぞ」

ローズ 「頼んでない」

サクちゃん 「ぬわっはっは。何が目的か知らんがここまで盗人よ。と王が申しております」

モリバー 「ブロッコリーー！」

「無礼者。ブロッコリー大王とおよびしろ」

「お前に用はないんだ。カリ・フラワー。用があるのは」

「宝か。宝目当てか。ぬわっはっはは、残念であったな。わしは強欲な野菜の王。アレキサンドロス・ブロッコリー。宝と名の付くものはすべてわしの腹の中。食ってしまったわい。盗めるものなら盗んでみるがよい！ ぬわっはっはと王は申しております」

モリバー 「宝はすべて腹の中？」



「ローズ。王にとって君は宝じゃないんだってさ。どんな卑怯な手を使っても君を大事にするなら、それで君が幸せなら僕は手を

引くつもりだった」

「貴様！なにをするつもりだ！と王がお怒りだ」

「僕の大切な人を返してもらう。さあローズ」

ローズ「でも」

「お城の外の楽しいところ全部見たつもりか？」

ローズ「楽しいところ？」

「世界は広いんだ。まだまだたくさん楽しいこといっぱいだ。一緒に帰ろう」

「ローズ気は確かか、忘れたわけではあるまい！ わしを裏切れば貴様の国は！」

「国は守ろう一緒に。さあ」

モリベーの手を取るローズ

ローズ 「楽しいところたくさん連れて行って」

「もちろんだ」

「ええい！衛兵どもやってしまえ！と王のご命令だ！」

「待たせたな！ 加勢するぜ！」

「ミッチー チュリップ！ よくぞ姉さんを！」

「2人とも……」

「お礼はあとで言ってくれ」

「かかれー！」

4人  
「うおおおおお！」

少し、ストップモーションをした後笑い出す5人。ミヤザキが音響を操作し、BGMを落とす。

「あっははははは」

5人

サクちゃん

「いやあなんだかんだ。できたね」

モリバー

「ほっとんどエチュードみたいなもんだったけどな」

ローズ

「後半は結構いい芝居してたじゃん。ミチバー」

ミチ・モリ

「混ぜないでよ（混ぜんなよ）」

ローズ

「サクちゃんも最高だったよ」

サクちゃん

「えー、ありがとう」

ローズ

「サクちゃんが悪役したのってこの芝居だけだね。結構好きなんだー悪役サクちゃん」

サクちゃん

「カリフラワーは悪役じゃないよ。彼女はブロリンのことが好きただけだから」

ミッチー

「え、そうだったの？」

サクちゃん

「私の中ではね」

ローズ

「おっとーミッチー。ブロリンに焼きもちかー」

ミッチー

「なにそれ。やいてないよ」

モリバー

「強欲な王様。宝物はおなかの中にため込んで……」

ローズ

「どうしたの？ モリバー」

モリバー

「だからめちゃくちゃ重たいって設定で。少しでも重くするために実際に」

モリバー、ぶつぶつ言いながらブロリンの頭を取り外す

ミ・宮・サ・ロ

「ええええ」

モリバー

「ほらービンゴー」

ミッチー

「ちよっとまって。ブロリン頭外れたっけ？」

サクちゃん

「言われてみたらそんな仕掛けもあったような」

ローズ

「中は？ 中。何入ってるの？」

モリバー

「それがよー。俺入れた覚えはないんだけど。これタイムカプセル？」

ローズ

「タイムカプセル!？」

モリバー

「多分おれたちの」

ミッチー

「全然覚えてないや」



ミヤザキ

サクちゃん

ミッチー

ローズ

サクちゃん

ミッチー

サクちゃん

ミッチー

モリバー

サクちゃん

モリバー

ミッチー

モリバー

ローズ

モリバー

ミッチー

モリバー

ローズ

サクちゃん

モリバー

宮﹂.サ.口

モリバー

ミッチー

サクちゃん

ローズ

ミッチー

モリバー

「いや確かに、卒業式の後、川セン発案でブロリンをタイムカプセルにした」

「おお川センか」

「顧問の川嶋先生。元気かな」

「懐かしいな。でも確かに川センならタイムカプセルとか言いそう」

「みんな青春の最後にとびきり青春しよう！」

「川セン。青春って何するのさ」

「ずばりタイムカプセル。開けた瞬間忘れたはずの青春が顔をのぞかせるのよ。くーっ青春！」

「ああ川セン、言いそう」

「なあ！そろそろ中の物、発表していいか！」

「おっ。わくわくするね」

「だろ。俺がいなきやタイムカプセルなんて思い出せなかったんだから、感謝しろよ」

「モリバーだつてタイムカプセルのこと忘れてたくせに」

「ばっか。頭が外せるのを思い出せなきや、みつけれなかったろ」

「いいから早くしてよ」

「わかったつて。おっこれは、俺だな。懐かしいな」

「もったいぶらないでよ」

「あの時代の人気者つて言えばこの人たちだよ。解散ライブなんて夢にも思わなかったな」

「あ。わかったかも」

「私も。モリバー、あれでしょ？私たちのミーティングソング！」

「ご名答！ 我らが平成時代の顔！ 嵐の通算20枚目のシングル」

「Happiness」

「我ながら、神がかったチヨイスだぜ」

「本当に！モリバーナイス！」

「確か、ミーティングが続いた時期があつてさ。皆気が滅入っちゃつてて」

「せめて皆でテンション上がる曲持ち寄つてかけようー！ つてなつたんだけど」

「結局モリバーがもつてきたHappinessばっかかけてたんだよね」

「やっぱあの時は嵐が最強だったもんな。感謝しろよ。ジャニオタのねーちゃんからこのCDもらうのにめちやくちやくき使われた

んだから」

ローズ 「はいはい。感謝感謝」

サクちゃん 「本当に何回も聞いたよーねーこれ」

ミッチー 「皆好きすぎてミーティング中に口ずさんじゃって、話進まないなんてのもざらでや」

ローズ 「走りだせー」

モリベー 「走り出せー」

サクちゃん 「明日を迎えに行こう」

ミッチー 「君だけの音を聞かせてよ 全部感じてるよ」

ミ.サ.モ.ロ 「止めないで 止めないで」

ミヤザキ 「これは誰のだー？ 稽古ノートって書いてある」

ローズ 「あ、それアタシだ」

モリベー 「止めないでー！？ 今気持ちよく歌っていたら」

ミッチー 「そうだよ。空気読めないな」

ミヤザキ 「俺に許可なく歌いだす方が悪い」

モリベー 「はあ！？ なんだそれ」

「歌はみんなで遊べないからやめなさい。皆で楽しめる遊びを選びなさい」

「あつはつは。思い出した。ミヤザキ君ってすごい音痴だった」

ローズ 「そうだった。そうだった」

ミッチー 「そういえば、カラオケで特訓したよね」

「したした。土日集まってフリータイムでさ」

「ミヤザキにあれこれ教えられるのとかレアだったよな」

「そんな可愛らしいエピソードもなければ、俺は音痴じゃない」

「じゃあ一緒にハピネス歌おうぜ」

「音程を合わせるのが苦手なだけだ」

ローズ 「音痴なんじゃん」

「そもそも音程を合わせるといふ行為が理解できない。なぜ俺が音程に媚びを売らなければならないんだ。そこまで言っなら、音程がおれに合わせろ」



ローズ

「さすがミヤザキ」

サクちゃん

「歌が苦手って言えばいいだけなのに」

ミッチー

「絶対に崩さないプライド」

モリバー

「よ！ お見事！」

4人拍手する

ミヤザキ

「それで？ この稽古ノートどうする？ みんなで読むか」

ローズ

「ぎゃー何考えてんの。ダメに決まってるじゃん」

ミヤザキ

「そうなのか？ 歌が上手ならさぞ稽古ノートも上手なんだろう？」

ローズ

「何その理屈。怖すぎるんだけど」

モリバー

「いやー、ミヤザキは根に持つねー」

ミッチー

「稽古ノートってあれでしょ。ローズが日記代わりにつけてたノート」

サクちゃん

「そうそう。その日のダメ出しとか決まった段取りとかも細かくメモしてさ。……みたいなの」

ローズ

「ダメダメ。いくらサクちゃんでもダメ」

サクちゃん

「ちえー」

ミッチー

「どうせまじめなことしか書いてないんだから恥ずかしがることないじゃんね」

モリバー

「稽古ノート改め真面目ノート」

ミッチー

「ダメ出しなんかもびっちり書いてあつてさ」

ミチ・モリ

「めちゃくちゃ苦手だった」

ミヤザキ

「お前達はダメだし多かったもんな」

モリバー

「親の仇みたいにさ、稽古終わりにはダメ出しの洪水」

ミッチー

「僕らは稽古ノートに押しつぶされて死んじゃう夢までみたんだから」

ローズ

「ご、ごめんね」

サクちゃん

「それだけ伸びしろがあつたんだよ」

ローズ

「そうそう。そういうこと」

モリバー

「ふーん」

サクちゃん  
「この中で一番お芝居好きだったのはローズだったよねえ。稽古ノートもそうだし、練習だってほとんど休まなかったし」

ミッチー  
「高校卒業してからもお芝居してたのってローズだけだったよね」

サクちゃん  
「そうそう。今もお芝居、続けてるの？」

ローズ  
「ううん。女優は諦めちゃった。結構食らいついたつもりだったんだけどね。とうとう親にいい加減にしろって。今は美家の八百屋。へいらつしやい！ ってね」

サクちゃん  
「そっかあ。またローズのお芝居みたかったんだけど、残念だなあ」

ローズ  
「そういうサクちゃんは？」

サクちゃん  
「え？」

ローズ  
「サクちゃんはなんでお芝居やめちゃったの？ サクちゃんだってお芝居大好きだったじゃん。演劇部作ったりさ」

サクちゃん  
「まあそうなんだけどね」

ローズ  
「なんで？」

サクちゃん  
「特に理由なんてないよ。大学行ってそれとなくお芝居から離れちゃっただけで。お芝居が嫌いになっちゃったとかそんなことはないし」

ローズ  
「……そっか」

モリバー  
「おーいミッチー。面白いもん出てきたぞ」

ミッチー  
「え？」

モリバー  
「じゃじゃーん」

宮・ミ・サ・ロ  
「おおおお」

ミッチー  
「僕の稽古着」

モリバー  
「なんでこんなの入れてんだ」

ミッチー  
「さあ。きつと入れるもの思いつかなかったんじゃないかな」

モリバー  
「じゃあ早速お着換えタイムだな」

ミッチー  
「ええー？ いやいや着替えないよ」

モリバー  
「恥ずかしがんなって」

ミッチー  
「いや別に恥ずかしいとかじゃなくて」

モリバー  
「じゃあなんだよ」

ミヤザキ  
「モリバー」





ミッチー 「そうそう。ミヤザキからも言ってやって。悪ふだけが過ぎるって」

ミヤザキ 「そっち側抑えろ」

ミッチー 「ええー!」

モリバー 「よしきた」

ミヤザキ、モリバーでミッチーをホールド。

ミッチー 「警備員を抑え込むとかとんだ悪党じゃないか」

モリバー 「ごちゃごちゃうるせーよ」

ミヤザキ 「よし! サクちゃん」

モリ・ミヤ 「脱がせろ」

ミッチー 「2人して何言ってるの。セクハラだよ。今の時代本当に厳しいんだから気をつけた方がいいよ?」

サクちゃん 「ええ」

ミッチー 「ほらサクちゃん困ってる」

サクちゃん 「いいの?」

ミッチー 「思ってた反応と違う!」

サクちゃん 「いや、ミッチーの稽古着姿みたいしさあ」

ミッチー 「え、あ、そう?」

ローズ 「あはは。ミッチー照れてる」

ミッチー 「照れてないよ、何言ってるの」

モリバー 「早くしろよ」

サクちゃん 「じゃあ失礼して」

宮・モ・ロ 「フー!」

ミッチー 「わーっ! わかった。一人で着替えるから! もう」

モリバー、ミヤザキを振りほどき、ホワイトボードの後ろへ移動するミッチー

「わざわざ隠れなくても。当時なんて皆、目の前で着替えてたのに」

「いやミッチーは当時も隠れて着替えてた。なんなら女子が着替えるときは目をつむってた」

ローズ  
「嘘っ。ピュアー」

ミッチー  
「ほっとしてよー」

「ねえミヤザキ君は？」

「ん？」

「タイムカプセル。何入れたの？」

「あー、シャープペン」

「え！ シャーペン！？」

「ううんは！ マシた、マシでシャーペン入ってた」

「恥かくのはこめんだったからな」

「可愛いねーカキ！」

「ミヤサキ君にしたいよね」

モリハート

「言はなう」

「お、たあ、たあ、如き女」

「サハ、女ヤン」

「ミヤサミミミカ」

「あんなに木にかなうものがない」

「三つ、ミッデニヨク、ふつふつミッポハ、ミホ、ノニ、ちぎつ、ちやう、ちやう、と、

「ミフザニ」

「い、え、うん、はい」

ミッザキ

「まろ、氏」

「ふてふてふて書いてあるの?」ナクちゃん

「あつはつは。丘泰やんごつてよ！」

「完全二、おまじないじゃー」



ローズ

「しかも、さん付けって」

ミヤザキ

「俺そんなことしてたのか…」

モリバー

「してたんlaro. ほら証拠」

ミヤザキ

「陰謀だ。誰かが俺をねたんで貶めようとしている」

ローズ

「誰がそんなことすんのよ」

ミヤザキ

「じゃあ、あれだ。デスノート」

サ・モ・ロ

「デスノート!？」

ミヤザキ

「そう。名前書いて殺すつもりだったんだ。心臓麻痺で」

サクちゃん

「元カノを？」

ミヤザキ

「そうだ」

モリバー

「それはそれで黒歴史だよな」

ローズ

「恋のおまじないしてましたって言えば済む話なのに」

ミヤザキ

「……そういつたらお前ら、笑うじゃないか」

ローズ

「そりゃもちろん」

モリバー

「腹抱えて笑うけどさ」

モリ・ロー

「ワハハハハ」

ミヤザキ

「こんなはずじゃなかった。何で俺が一番恥かいているんだ」

サクちゃん

「まあまあミヤザキ君にも、可愛いところあったってことで」

ミッチー

「ちよつとー。人に着替えさせといて何楽しそうな会話してんのさ」

ローズ

「おおお！ ミッチーだ！」

サクちゃん

「やっぱその服着るとミッチー感が増すねえ」

ミッチー

「確かになんとなく若返った気はする」

ミヤザキ

「ほら。ミッチー、ポーズとれ」

モリバー

「おい、顔硬いぞー」

サクちゃん

「はい。こつちも向いてー」

ローズ

「ファンサしてー」

ミッチー

「何で僕の撮影会が始まってんの」

ミヤザキ 「安心しろ。ちゃんと盛れるので撮ってやるから」

ミッチー 「盛らなくていいよ！ ていうか折角なら僕のじゃなくてみんなで撮ろうよ」

ローズ 「確かにそれもそうだ」

サクちゃん 「いいねいいね」

モリバー 「何気にはじめてじゃねーか。集合写真なんてよ」

サクちゃん 「あ！ そっかもー」

ミッチー 「そう？ 何回かあったんじゃない？ 卒業アルバムの部活ページのとか」

ミヤザキ 「いやあの時は」

ローズ 「あっはっは思い出した。撮影の日、モリバー水疱瘡で学校休んでさ」

ミッチー 「高校生になって水疱瘡ってつてみんなで笑ったっけ」

モリバー 「俺だけ別日の写真合成だもんなあ」

ミヤザキ 「ほら撮るぞ。パルメザン」

4人 「チーズ！」

ミッチー 「見せて見せて」

サクちゃん 「あはは、めっちゃいいじゃん」

ローズ 「これストーリーにあげていい？」

ミッチー 「僕は待ち受けにしよう」

ミヤザキ 「エアドロで送ればいいか？」

モリバー 「ていうか連絡先交換しようぜ」

ミヤザキ 「お前ともか？」

モリバー 「何で嫌そうなんだよ」

みんなでわいわい談笑。

ローズ 「これで、タイムカプセル全部だっけ」

ミッチー 「うん？ あー（数えて） いやひとつ足りなくない？」

モリバー 「あと誰だー」



サクちゃん

「……はい！私のがまだ残ってまーす」

モリベ

「おお。その感じは何入れたか覚えてるのか」

サクちゃん

「ふふふ。実はねー、さっき思い出して。私のはすごいよー」

ローズ

「なんだなんだ」

サクちゃん

「じゃじゃーん」

ブロリンの中から表彰状を取り出す、サクちゃん。ミッチー以外盛り上がる一同。

ローズ

「あー！ 県大会金賞だー！」

サクちゃん

「そう！ 当たり前！」

モリベ

「ブロリンが食ってたのか、これ」

ローズ

「こういうの。学校に飾ったりされてるんじゃないんだねー」

ミヤザキ

「この時、一緒にもらった脚本賞は飾ってもらってるぞ」

モリベ

「それは、なんでだよ」

サクちゃん

「すごいよね、ミヤザキ君も脚本賞獲っちゃうし、私たちは創部三年目にして全国大会！」

ミヤザキ

「地方紙にも取り上げられたしな。北高演劇部快挙！ 演劇部全国コンクール出場」

ローズ

「川センなんて、こんなでっかい垂れ幕作っちゃってさ」

モリベ

「あー、あの屋上から垂らしても地面についてちゃうやつな」

サクちゃん

「あれは笑ったよね」

ローズ

「でも垂れ幕も相まって、学校中から応援されてさ」

モリベ

「皆、気合いはいつてたよなあ」

ミッチー

「懐かしいけど、ちよっぴり苦い思い出だね」

モリベ

「ん？ 何が？」

ミッチー

「何がって金賞だよ。今思えば銀賞くらいが丁度良かったのかなって」

モリベ

「いやいや何言ってたんだ？ 普通にいい思い出じゃねえかよ。金賞でよかったろ」

ミッチー

「え？」

ローズ

「そうだよ。銀賞じゃああの打ち上げはなかったじゃん」

サクちゃん

「あ！あの焼肉！」

モリバー

「はじめはワンカルの予定だったんだけど」

ローズ

「川センが金賞獲った教え子に安い肉なんて食わせられんって言うってお店急遽変更、それがなんと」と

宮・サ・モ・ロ

「叙々苑！」

サクちゃん

「川セン太っ腹だよねえ」

ミヤザキ

「あのあときっちり後悔してたけどな」

ローズ

「あはは。川センっぽい」

ミッチー

「ね、ねえ。ちょっと待って。皆本気で言ってるの？」

ミヤザキ

「もちろん。叙々苑は旨いだろっ」

ミッチー

「そりゃ、叙々苑はおいしかったよ。ワンカルだって美味しいって思ってたけどその何倍もって。そうじゃない、焼肉の話じゃないよ」

モリバー

「じゃあ一体なんの話だよ」

ミッチー

「県大会で金賞をとって全国に行った時の話だよ。もちろんその時は本当に嬉しかった。皆の夢が叶ったんだもん。でも今となつてはいい思い出じゃない。夢なんか叶わなければって何度も思ったよ。勝手にみんなもそう思ってるんだって思っていたけど、違<sup>45</sup>うの？ 皆にとつては本当にただの思い出なの？」

モリバー

「当たり前だろ。めちゃくちゃ良い思い出だつて。もしかしたら人生で一番かもしれないねえ。皆だつてそうだろう？ ミッチーさ。お前、さつきから何言ってるんだ？」

ミッチー

「そっか。モリバーは覚えてないんだ」

モリバー

「だから、何をだよ」

ミッチー

「皆は？」

サクちゃん

「……私も、何の話かわからないや」

ミッチー

「そっか。……そっか」

モリバー

「お前、ほんといい加減にしろって。何の話してんだって」

ミッチー

「ミヤザキ」

ミヤザキ

「なんだ」

ミッチー

「地方紙。全国行った後も取り上げられたの覚えてる？」

ミヤザキ

「……ああ。覚えてる」



ミッチー 「内容は？」

ミヤザキ 「北高演劇部、全国にて酷評。やはりまぐれだったか。県大会にて審査員買収疑惑浮上」

モリバー 「そんなこと書かれてたのか」

ミヤザキ 「ああ。小さな記事だったけどな」

ローズ 「審査員の先生からすごい酷評受けてさ。それを面白がってそんな記事書かれちゃって。もちろん川センがクレームの電話入れて

ちゃんとお詫びもされたけど」

モリバー 「俺だって。そりゃ、結構きついこと言われたってことくらいはうつすら覚えてるけどよ」

ミッチー 「うつすら？」

「でもそんなのなんてことないはずだろう？ 頭硬い審査員には好きに言わせとけばいいっていつも皆で笑い飛ばしてたじゃねーか」

ミッチー 「その時だけはそうできなかったんだよ。……覚えてないの？ 全国で酷評を受けた理由」

モリバー 「いやそこまでは」

ミッチー 「覚えてない？ うつすらとも？ なんで？ あの全国の舞台でサクちゃんは死にかけたんだよ！？」

モリバー 「ええっ」

ミッチー 「あの舞台で一歩間違えばサクちゃんは死んでたかもしれないけれど、忘れちゃってるんだ？ いい思い出だったねって笑って話

せるんだ！？」

サクちゃん 「ちよっと待って、ミッチー。もしかしてあの事故のことを言ってるの？ あんなの気にすることじゃないよ。私氣にしたことなん

かないし。そんなことで、いい思い出じゃなかったなんて言わないでよ」

ミッチー 「気にすることだよ。僕にとっては、そんなことで片付けられるようなことじゃないんだ。僕だけじゃない。ここにいる皆は一生

気にしないといけないはずなんだ。サクちゃんが作った演劇部で、サクちゃんが死にかけた。あれだけお芝居が好きだったサクち

ゃんがお芝居に殺されるところだったんだ。ううん、お芝居にじゃない。僕たちに殺されるところだったんだ」

サクちゃん 「ミッチー」

ミッチー 「僕は今でも時々夢に見るんだよ。あの舞台のラストシーン、サクちゃんが死にかけるあの瞬間を。夢の中で僕は謝るんだ。ごめ

んねって。夢の中のサクちゃんは笑顔で許してくれるんだけど夢の中の僕は僕を絶対に許さないんだ」

モリバー 「あのさ！ 悪いけど俺やつぱり覚えてねーよ。なあ、本当にそんなことあったのか？ だとしたらサクちゃんは、なんで死にか

けたんだよ？」

「……モリバー。なんで何も覚えてないんだよ。お前。なんでだよ！」

モリバー 「うるせーなっ！ なんでも糞も知るかよ。忘れてるもんは忘れてるんだ。忘れた理由なんて覚えてるわけねーだろうが」

ミッチー 「逆ギレかよ」

モリバー 「大体、俺の中の演劇部の思い出は楽しいことしかないんだよ。俺が夢の中で会ってお前らはいつも下らねえこと言ってわいわい笑ってるんだ！それを死にかけたとかいい思い出じゃないとか、言いがかりつけやがってよ」

ミッチー 「言いがかりってなんだよ」

モリバー 「言いがかりだろうが！人の思い出汚すんじゃないよ」

ミッチー 「……なんだよ。なんだよ。その言い方」

モリバー 「なんだやるか、泣き虫ミッチー」

ミッチー 「望むところだ。北高警備室の吉田沙保里とは僕のことだ！」

つかみ合いのケンカに発展するミッチー、モリバー。お互いが突き飛ばしたところで間に割って入るローズ。

ローズ 「ちょっと！いい加減にしろよ！一人とも！落ち着いて！」

ミッチー 「ローズはよく落ち着いてられるね」

ローズ 「落ち着くも何も、もう10年も前のことなんだよ。サクちゃんは生きてるんだし、いろいろあったけどいい思い出だった。そうでしょ？ね？サクちゃん」

サクちゃん 「うん、そうだよ！楽しかった！いい3年間だった！」

ローズ 「ほら2人仲直りしな！10年ぶりなんだから暗い話は抜きでさ」

モリバー 「そのけよ、ローズ」

ローズ 「のくわけないじゃん。バカバー。いい年して何殴り合ってるの？」

モリバー 「年は関係ねーだろうよ」

ローズ 「あるでしょ。いつまでガキのまんまのつもり？少しは大人になれって言うてるの」

モリバー 「大人になるってなんだよ。夢追いかけて挫折して実家の八百屋継ぐことがそうなのかよ」

ローズ 「何それ。私のことは関係ないじゃん」

モリバー 「自慢のノートはそういう時、助けてくれねーんだな」

モリバー、ローズの稽古ノートを手に取りパラパラめくる





ローズ 「は？ ちょっと触らないでよ」

モリバー 「おうおう。こんなに細かく毎日毎日。これが何の役にも立たないなんて、超ウケるな」

サクちゃん 「ちよつとモリバー」

モリバー 「こういうもん捨てねーと大人になれねえってんならさ、そんなもんになる価値なんかねえよバーカ」

ローズ 「放っておいてよ！」

モリバーの頬を打つローズ。

モリバー 「いってーな」

ローズ 「何も覚えてないからって、私に当たらないでよ」

『プシュッ』ミヤザキが缶ビールを空け、飲む。

サクちゃん 「こんな時、何飲んでんの」

ミヤザキ 「エビス。あーまず」

ミヤザキ、缶ビールを置き立ち上がる。

ミヤザキ 「ミッチー、押し付けるなよ。あの事故をどう受け取ろうがそいつの自由だ」

ミッチー 「だって」

「全部忘れてるなんてあまりにもひどい。か？」

「その通りだよ」

「別にひどくないさ。都合の悪いことは忘れて、思い出を美化して。それにすぎらなきやっていけなかった。それだけだろ？ なあモリバー」

モリバー 「お前に俺の気持ちはわかんねーよ」

ミヤザキ 「そりゃそうだ。俺は勝ち組だからな」

ローズ 「そういうとこ。治らないねミヤザキ。だから嫌われるんだよ」

ミヤザキ 「嫌われ上等。負け組に堕ちるよりよっぽどいい」

ローズ 「あっそう」

ミヤザキ 「ていうかローズ、お前も忘れてただろ？」

ローズ 「え？」

ミヤザキ 「あの事故だよ。サクちゃんが死にかけたこと、お前も忘れてただろ？ 暗い話は抜きでって、自分のこと棚に上げて言うセリフじゃないよな」

ローズ 「アタシは忘れてなんかいないよ。忘れたことなんかいないよ」

ミヤザキ 「じゃあなんでサクちゃんにあんなこと聞けたんだ？」

ローズ 「あんなことって」

ミヤザキ 「サクちゃんは、なんで芝居やめたのかって」

ローズ 「それは」

「決まってる。あの事件のせいさ。あの芝居で死にかけたからだ。俺たちのせいじゃないか」

サクちゃん 「ち、違うよ、ミヤザキ君。本当にお芝居やめたのとあの事故は関係ないから。皆と3年間お芝居やって全国まで行って満足しちゃったんだよ。出し尽くしたんだ」

ミヤザキ 「出し尽くした？ お前がか？」

サクちゃん 「そうだよ。やり切ったんだ」

ミヤザキ 「それは嘘だ」

サクちゃん 「嘘じゃ」

ミヤザキ 「嘘じゃないなら。……変わってしまったんだな。一回全国行っただけで満足できるとかそんなレベルじゃなかったよ。お前の芝居好きは」

「芝居好きは」

サクちゃん 「ミヤザキ君」

ミヤザキ 「初めてだったんだぞ。好きなもので人に負けたと思ったのは。俺だって芝居は好きだった。でないと何本も本なんか書けない。正直この中の誰よりも芝居が好きだったと思っていたし、芝居でも誰にも負けないと思ってた。でも一緒に芝居して直感した。こ

いつはおれなんかより遥かに芝居が好きなんだなって。敵わない。なんならこいつの演技をそばで見たいそう思ったんだ。この俺がだぞ」

サクちゃん 「本当にお芝居をやめたのとあの時の事故は関係ないんだよ……ただ。皆とお芝居するのが楽しすぎたのかな、他の人たちとお芝居しようってあんまり思わなかったただけなんだ」



ミヤザキ

サクちゃん

「……そうか。お前にしては、案外普通なんだな」  
「そりゃそうだよ。私はお芝居が好きで女優になりたかった、それだけのどこにでもいる普通の元女子高生。お芝居始めた理由も辞めた理由も平凡に決まってるよ」

ローズ

「……サクちゃんが平凡？」

サクちゃん

「え？」

ローズ

「それは無理あるって。実力をひけらかさないのはサクちゃんのいいところだけど。そこまで来ると流石に嫌味だよ」

サクちゃん

「ローズ？」

ローズ

「サクちゃんはどんな役をやらせても、キラキラ輝いてた。サクちゃんにしかできないその役になるんだ。結局、私一回もサクちゃんには敵わなかった」

サクちゃん

「何言ってるの？ ローズめちやくちやお芝居上手だったじゃん。私、ローズのお芝居お手本にしてたんだよ？」

ローズ

「演技の上手い下手の話じゃないんだよ。ていうか普通にサクちゃん演技うまかったし。でもそういう表面的なところじゃなくてさ。もっと根っこところで本物の女優だったって言うてるの。私、自分の役やりながら、サクちゃんだったらどう表現するのか、どう演じるのかなんて考えながらずっと芝居してた。卒業してからまだ？ それでいつか、ちゃんと胸張れる女優になって、サクちゃんに対等な立場で肩並べて一緒に舞台に立つのが私の目標だった！ 夢だった！」

サクちゃん

「……対等とか何言ってるの？ はじめから最後までそうだったじゃん」

ローズ

「なのにさ。そんな普通な理由で何勝手に芝居辞めてんの！？ 勝ち逃げしないでよ！」

サクちゃん

「……ねえ。ちよつと。みんなおかしいよ！ さっきから何言ってるの？ 私そんなにすごいじゃないから。ずっと一緒にいたんだからそんなのとづくに知ってるはずでしょ？ なのに勝手にすごいやつだすごいやつだって持ち上げてさ、人を超人みたいに崇めて。何これ」

ローズ

「十分超人じゃん。崇めて何が悪いの。追いかけて何が悪いの。お芝居のことだけじゃないよ。いい大学行ってそれなりの会社で働いて、寿退社」

サクちゃん

「別に普通じゃん」

ローズ

「それを普通って言えるのが超人なんだって、なんでわかんないかな」

サクちゃん

「……そっか。気づかなかったなあ。私超人だったんだー。ちよつと背伸びした大学に入れたはいけど、これといった目標はなくて、お芝居もなんとなくする気になれなくて、気づいた時にはなんだか周りとなじめてないなって違和感があつて、でも必死になんとか取り繕い続けて、そのままなんとなく就職して、なんとなく仕事して、表面だけ元気な無気力人生。若さって武器もいつの間になくなって。このまま何にもない人生が続くのかなーって諦めかけてた時に、そんな私でも愛してくれる素敵な人

静寂。

と出会えて、ああ。こんな私でも普通に結婚して普通に子供産んで普通に幸せになれるんだって。希望がさして、さしたところで病気になって子供産めなくなつて。彼はそれでも結婚してくれるって言ってくれど、彼はとっても子供が好きで。結局自分から結婚断つて。すごいでしょ超人の人生！苦勞も苦惱も全くなし！あー順風満帆！……バカじゃないの。一緒だよ。私もミッチーもモリバーもミヤザキ君もローズもみんな一緒。……一緒だよ」

ローズ 「……サクちゃん」

サクちゃん 「なーに」

ローズ 「ごめん」

サクちゃん 「なにが？」

ローズ 「色々」

サクちゃん 「私、同情なんかいらないよ」

ローズ 「違うよ。私そんなんつもりじゃ」

サクちゃん 「ごめん。意地悪いつてみただけ。怒つてないよ」

「あー久しぶりにケンカした。結構体力使うんだね。……皆ごめん」

「あ、あのさ、話蒸し返して悪いんだけど。サクちゃんの事故ってなにがどうなったんだ？俺覚えてないって言ったのに話進んじやうからずっとモヤモヤしてて」

「最後の台本覚えてるか？」

「ああ、「旅立ちの日に」だろ」

「正確には「Goodbye 青春く旅立ちの日に」」

「そんなタイトルだっけ」

「ださいよね」

「高校演劇の審査員はこういうのが好きなんだ」

「それで？」

「ラストシーン、サクちゃんが首を吊るシーンだ。本来は重さに耐えられずロープがほどけて自殺は失敗する筋書きだったんだけど」



サクちゃん

「ほどける仕掛けがうまくいかなくてさ」

モリバー

「……俺、なんでそれを覚えてねえんだ」

ミッチー

「知らないよ」

モリバー

「いやいや待て待て。そもそも首つりだったか？」

ミッチー

「え？」

モリバー

「サクちゃんの自殺。首つりだったか？ 飛び降りじゃなかったか？」

ミッチー

「ええ？ あれ、でも言われてみたら飛び降りも記憶にあるな」

モリバー

「だろ。屋上のシーンで」

ミッチー

「いやでも確かに首つり……あれえ」

ローズ

「台本が変わったの。県大会までは確かに飛び降り。でも全国では首つり」

モリバー

「なんで？」

サクちゃん

「県大会終わった後、審査員の人の批評で首つりのほうがよかったんじゃないかって言われて。ほら死を連想させる具体的なアイテムがあった方が緊張感や臨場感がうまれるとかなんとか」

モリバー

「それでラストシーン変えたのか」

ローズ

「皆、そんな必要はないって言ったんだけどね。演劇の評価基準なんて曖昧なんだ。審査員に媚びて何が悪いって」

ミヤザキ

「おい、モリバー。こつちを見るな。その目やめろ」

モリバー

「あ。悪い」

ミヤザキ

「言っておくけど、仕掛けの段取りはしっかりやってあつて危険はなかった。仕込みがうまくいってれば何の問題もなかったんだ」

モリバー

「仕込みでなんかあったのか」

ローズ

「その時の舞監アタシでさ。ロープのセットをしたのもアタシ。本番の日は、小道具のロープがなかったんだ。仕掛けがしてあつたやつ。だから急遽市販のロープで間に合わすことになって。テストではうまくいったんだけど……」

モリバー

「じゃあ小道具は？ ロープの担当は？ 誰だったんだよ」

全員がモリバーを見る。静寂。

モリバー

「……俺？ ロープの担当、俺だったのか？」

ローズ

「……うん。ほら」

稽古ノートを見せるローズ、それをしばらく眺めるモリバー。

モリバー「……ごめん。ごめん！ ごめんー！ 俺のせいなんじゃなか…。なのに俺」

サクちゃん「違うよ、モリバー！ あれ私だって悪いんだ。ホントはミッチーが舞台に入ってきてから首をつらないといけないのに、先走っちゃって。ちゃんとミッチーが入ってくるの待ってた。ロープの仕掛けがうまくいかなくても鉢で切ってくれることになったのに」

ミッチー「……思い出した。舞台袖でその鉢が見つからなくて、それで出るのが遅れて……」

ローズ「皆。ちよつとずつ悪かったんだ。ほら。当時の私たちもそう書いてる。誰も誰のことも責めてない」

モリバー「そつか。ちよつとだけ気が楽になったよ」

「僕たちが原因でサクちゃんが死にかけたって事実是不変わらないけどね」

「ミッチー、ありがとね。ずっと気にしてくれて。でもね私全然気にしてないから、忘れてたくらい。どっちかというあの記事の方がつらかったな」

ローズ「今思い返してもむかむかする」

「安心しろ。あの新聞社とつくに潰れたから」

「え、そうなの！？」

「ああ。経営が傾いてたらしいぞ」

「性格悪いかもだけど、ちよつといい気味かも」

「だなー」

「とか言つて、実は銀行員ミヤザキが融資断つたのがとどめだったりして」

「かもな」

「……マジでー？ ……」わ！

「冗談だぞ」

「冗談に聞こえねーって。ミヤザキならやりかねねーもん」

「……そんな風に見えるのか？ そこまでしないぞ？ 俺は」

「かわいそうーミヤザキが傷ついてる」

「モリバー」

サク・ミチ



モリバー 「これ俺悪くない？」

それぞれ笑い出す。

サクちゃん 「じゃあみんな、ケンカは終わりでいい？」

ミッチー 「うん。皆。ごめん」

ミヤザキ 「謝るなよ」

ローズ 「そうだよ」

モリバー 「でもあれだな。皆変わってねーな」

サクちゃん 「変わらなすぎ。皆、高校生のまんま年だけとったみたい」

ローズ 「それ言える。いっちゃ前に酒だけ飲んでさ」

サクちゃん 「ダメだね。それじゃ。みんなそれぞれに演劇部のこと引きずって、10年たってみんな偶然、部室に集まって。よく考えたらおかしいもん」

ミヤザキ 「確かに。仲良しにしたって、ちょっと異常だ」

サクちゃん 「ねえ皆。最後にお芝居しよっか」

ミッチー 「お芝居？」

サクちゃん 「Godbye青春〜旅立ちの日に〜ラストシーンだね。それで卒業しよう。北高演劇部から」

ローズ 「いいじゃん。賛成」

ミッチー 「おおっと！こんなところに台本がー」

モリバー 「おお！すげえ」

ローズ 「こんな昔の台本とってあるんだ」

ミッチー 「しかもなんと飛び降りバージョン」

サクちゃん 「おお。やっぱこっちのほうがいいよね。ミヤザキ君は書きたいもの書いた時の方が面白いんだから」

モリバー 「チュリップの大冒険しかりな」

ミヤザキ 「決まりだな。いっちゃやるか卒業式」

ミッチー 「うん」

サクちゃん 「じゃあまず打合せだねえ」

ローズ 「あ！モリバー」  
モリバー 「わかってるって」

モリバー、音響卓を舞台奥に移動させ、そのままCDプレイヤーを操作。嵐・「Happiness」が流れる。サイレントでみんな打合せを始める。しばらく曲の中、5人の打合せ風景が続く。真剣であり楽しそう。その最中で、ホワイトボードを動かしたり箱馬を動かしたりと舞台をする準備もできてる。途中でモリバーが掃除用具入れの上に置かれた小道具と書かれたBOXを取りに行き、

モリバー 「おわー！」  
ローズ 「どうしたの？モリバー」  
モリバー 「いや、俺多分すごいもん見つけちゃった」  
ローズ 「なになに」

モリバー、布のようなものを手に持っている

モリバー 「いくぜ？ じゃじゃーん！」

ミッチー、ミヤザキ。布を広げると、それは「北高演劇部！」と書かれた垂れ幕。

宮ミ・サロ 「うわあああああ」

ローズ 「垂れ幕だあ！」

サクちゃん 「すごい……。残してくれてたんだ」

ミッチー 「あれ。演劇の劇って激しいだっけ」

サクちゃん 「ううん。これはね。川センが、演劇とは歴史ある文化でもあるが、激しく動き、激しく心を揺さぶるスポーツであるーよって垂れ幕は必要であるし、演劇の劇は「激しい」と書くべきである！って」

ローズ 「言ってた。言ってた。」

モリバー 「せっかくだし飾ってこうぜ。俺たちがいるこの部屋は北高演劇同好会じゃない。北高演劇部だからな」  
サクちゃん 「いいこと言うじゃんモリバー」





ローズ

「モリバーのくせに珍しい」

モリバー

「ばっか。俺はいつだって」

ミヤザキ、モリバーから垂れ幕を奪い、壁に垂れ幕を張り付ける

ミヤザキ

「こんなもんでどうだー」

ローズ

「おお。部室だー」

サクちゃん

「演劇部だー」

ミッチー

「この学校で初めてお芝居したのは僕たちなんだ。最後にお芝居するのも僕たちでなきゃね」

サクちゃん

「うん。その通り。…みんな。準備はいい？」

モリバー

「おうっ」

サクちゃん

「じゃあ行くよ。卒業式。Goodbye 青春、旅立ちの日」

5人、円形になる。

サクちゃん

「きたこー！演劇部ー！ふぁいつ」

宮ミモロ

「おっ」

サクちゃん

「ふぁいつ」

宮ミモロ

「おっ」

サクちゃん

「ふぁいつ」

宮ミモロ

「おっ」

5人

「ふぁいとおおおー！おおおおおー！」

5人気合を入れそれぞれの位置へ。ミッチー、サクちゃんは立ち位置。残りのメンバーは箱馬に座る。内、一名は音響卓を操作できるようスタンバイ。(劇中回想シーンは音響を入れる。(そのシーン時に出演していないメンバーが操作という決まり事の上で5人は芝居をする)サクちゃん真剣な面持ちで、決意をし靴を脱ぐパントマイム。そこへミッチーが入ってくる。

ミッチー  
「千歌ちゃん！」

サクちゃん  
「……なにに」

ミッチー  
「こんなところで何してるんだ？ 卒業式始まつちゃうよ」

サクちゃん  
「それは、みっちゃんも一緒でしょ」

ミッチー  
「…寒いよ。……靴。履きなよ」

サクちゃん  
「ねえ。2回目だね」

ミッチー  
「何が？」

サクちゃん  
「屋上で、2人会うの」

ミッチー  
「そうだね」

サクちゃん  
「思い出すね」

風の音などの環境音を流す。ミッチー、靴を脱ぐパントマイム。真剣な面持ち。

サクちゃん  
「高橋くん……だよな」

ミッチー  
「うわあ。びっくりした。と、隣のクラスの」

サクちゃん  
「岡本千歌。どうしたの？ こんなところで」

ミッチー  
「え、いや」

サクちゃん  
「高橋君も歌の練習？ 気持ちいいよね。屋上から歌うと」

ミッチー  
「あ、いや、えっと」

サクちゃん  
「違うか。そりゃそうだよね。合唱部じゃあるまいし。こんなところで歌うのなんて私くらいか」

ミッチー  
「お、岡本さんは合唱部なんだ」

サクちゃん  
「そうだよー。部員私入れてふたりだけど」

ミッチー  
「そうなんだ」

サクちゃん  
「それで？ 高橋くんは」ここで何を……(実の足元を見る)……いじめとか？」

ミッチー  
「いじめなんかでって思う？」

サクちゃん  
「え？」

ミッチー  
「その程度のことです自殺なんてって思う？」



サクちゃん  
「……」

ミッチー  
「そりゃはたから見たらそう思つかもしれないけど。僕にとってはその程度のことじゃないんだ。生きてるのがつらい。生きてても楽しいことがない」

サクちゃん  
「何も?」

ミッチー  
「何も。僕だつてできるなら生きていたいよ。死ぬのは恐いよ。でも」

サクちゃん  
「あるよ。楽しいこと。やまほど」

ミッチー  
「ないよ。どこにも見当たらないよ」

サクちゃん  
「つらいことで、今は隠れちゃってるだけだよ」

ミッチー  
「……そうなのかな?」

サクちゃん  
「きつとそうだよ」

ミッチー  
「だつたらいいな」

サクちゃん  
「…そうだ! 高橋君。合唱部はいらない?」

ミッチー  
「え?」

サクちゃん  
「合唱部2人しかいないから、今のままじゃコンクールも出られないんだ。友達を助けると思つてさ」

ミッチー  
「……いや、歌なんて苦手だし」

サクちゃん  
「でも今楽しそうって思つた?」

ミッチー  
「え?」

サクちゃん  
「いやそんな顔に見えたから。合唱やつてたらしかしたら辛くなくなるかも」

ミッチー  
「本当に?」

サクちゃん  
「ダメだつたらその時またここに來たらいいよ。……どうかな」

手を差し出すサクちゃん。一瞬迷い手を握るミッチー

ミッチー  
「やってみるよ」

音響がなくなる。

サクちゃん 「今思えば強引だったかな」

ミッチー 「強引すぎだよ」

サクちゃん 「やっぱり」

ミッチー 「でもそのあとの方がよっぽど強引だったけど」

音響が入る。ミヤザキ、モリバーが立ち上がり芝居に入ってくる

モリバー 「おうおう、パシリのミノリン。俺たちを呼び出すとは偉くなったなあ」

ミヤザキ 「どうした？ おれたちに金を貸したくなっただか」

モリバー 「あつはつは。それは傑作だ」

ミヤザキ 「やっぱりおれたちは友達だ。息がびったり。俺たちもちょうど金をかりたいって思っていたんだ」

サクちゃん 「あなたたちだったんだ。高野君、石橋君」

モリバー 「誰だお前」

ミヤザキ 「岡本。何の用だ」

サクちゃん 「いやあ別に用ってほどのことでもないんだけどね」

ミヤザキ 「じゃあそこをのけ。俺たちは実とお話するんだ」

サクちゃん、ミヤザキの頬を打つ。

サクちゃん 「サイテー」

ミッチー 「ちょ、ちよつと岡本さん」

モリバー 「おい、いきなり何するんだ」

サクちゃんにつかみかかろうとするモリバーを手で制するミヤザキ

ミヤザキ 「何の真似だ」

サクちゃん 「ム力ついたから殴ったんだ」



モリベー 「頭おかしいんじゃないか

サクちゃん 「ムカつくからいじめるのと同じ」

ミヤザキ 「……」

サクちゃん 「頭おかしいんじゃないの」

モリベー 「なるほどな。女の子に助けられる気持ちってどんな感じだ実」

サクちゃん 「高橋君をいじめてたこと認めるんだね」

モリベー 「だったらなんだよ。うざってーな」

ミヤザキ 「おい高野」

モリベー 「あん？」

サクちゃん 「察しがいいね。さすが学年トップの石橋君」

サクちゃん、胸ポケットからレコーダーをとりだす。

モリベー 「レコーダー」

ミヤザキ 「俺たちに何をさせたい。実に謝れってか」

ミッチー 「いや。いいよそんなの。別に、無理やりそんなことさせたって」

ミヤザキ 「違うのか？ じゃあなんだ」

サクちゃん 「合唱部にはいつてよ」

ミヤ・モリ 「はあー？」

サクちゃん 「コンクール出るのに人数あと2人足りないんだ」

ミッチー 「やっぱり無理があるよ岡本さん。このふたりに合唱なんて」

「そう？ 歌うと心は晴れるし前向きになれるし、幸せになれる。むしろぴったりだと思うけど」

「ふざけんなよ。もう3年だぜ。今更部活なんて」

「まあ別にいいけどさ（レコーダーをもちあげる）」

「きったねーな」

「コンクールが終わったらこれあげる」

「……やるしかないな」

ミヤザキ

モリバー 「まじかよ」

サクちゃん 「ありがと」

ミヤザキ 「よろしくな、実」

ミッチー 「う、うん」

音響がなくなる。モリバーとミヤザキはストップモーション。

ミッチー 「まさかあの2人と合唱することになるとはね」

サクちゃん 「やってよかった？」

ミッチー 「まあね」

サクちゃん 「じゃあよかった」

ミッチー 「でも最初大変だったんだよ。千歌ちゃんは知らないかもしれないけど」

サクちゃん 「え？ 何かあったの」

ミッチー 「実はね」

舞台の端によけるサクちゃん。音響が入る。ローズ、ミヤザキ、モリバーがお芝居に入ってくる。

ローズ 「あのさ。あんたたち」

ミッチー 「何？」

ローズ 「やる気ないなら合唱部やめてくれる？」

モリバー 「あ？なんだいきなり」

ローズ 「事情、詳しくは知らないけど。無理やり合唱部はいったんだよね？」

ミヤザキ 「だから何だ？ちゃんと練習にも出ているだろ」

ローズ 「出てるだけでしょ。やる気ないならほんとにやめて。迷惑だから」

モリバー 「口に気をつけろよ」

ローズ 「はっきり言おうか？ アンタたちと一緒に歌うくらいならコンクールなんて出たくないの。不愉快だから」

ミッチー 「そこまで言わなかったって」



ローズ 「あんたも。千歌のこと好きなのかなんなのか知らないけどさ。不愉快だから」

ミッチー 「え、いや、全然そんな」

ローズ 「とにかく。辞めるんなら事情は説明してあげるから、いつでも言ってね」

ミヤザキ 「おい佐々木」

ローズ 「学年トップも大したことないね。じゃ。」

ローズ、立ち去る。別の音響に切り替わる。

モリバー 「あつたまきた」

ミヤザキ 「まったくだ」

ミッチー 「あの、辞めたかったら辞めていいよ。レコーダーも渡すし、僕は何もしないから」

ミヤザキ 「見くびるなよ。実」

ミッチー 「え」

ミヤザキ 「特訓だ」

モリバー 「あのくそ女に目に物見せてやる。「旅立ちの日に」くらい楽勝だっつーの」

ミッチー 「あはは。千歌ちゃんの言う通りだ」

ミヤザキ 「何がだ？」

ミッチー 「課題曲の「旅立ちの日に」はね。前を向く歌なんだ。前を向いてどんどん先に進むその最初の一步なんだーって言ってて。ホントにそうなるなーって」

ミヤザキ 「最初の一步上等だ」

モリバー 「よっしゃ。特訓だ。気合入れるぜ」

ミッチー 「よし、みんなをぎゃふんと言わせるぞー！」

宮・ミモ 「おおおお」

音響がなくなる。ミヤザキ、モリバー、ストップモーション。

サクちゃん 「へーそんなことがあったんだ」

ミッチー 「うん。毎日自主稽古してたんだよ」

サクちゃん 「じゃあなるべくしてなったんだね、金賞」

ミッチー 「うん、僕もそう思う」

音響が入る。ローズ、芝居に入ってくる。

サクちゃん 「コンクールお疲れ様ーそして金賞おめでとー！かんぱーいつ」

宮・ミ・モ・ロ 「かんぱーいつ」

ローズ 「まさかここまでこれるとはね」

サクちゃん 「ねー。前を向いてどんどん先に進む最初の一步。良い一步だったね」

ローズ 「ていうか千歌、のど大丈夫？ 途中声でてなかったけど」

サクちゃん 「大丈夫大丈夫。酷使しすぎたんだね」

ミヤザキ、モリバー立ち上がる

ミヤザキ 「実」

ミッチー 「なに？」

ミヤ・モリ 「すまなかった」

ミッチー 「ええ！ もういいよ！ 顔あげて」

モリバー 「結局謝まれてなくて」

ミヤザキ 「もう二度とあいうことは誰にもしない」

ミッチー 「うん。わかった。レコーダーも渡すね」

ミヤザキ 「いや、それは持っておいてほしい」

ミッチー 「……わかった。さ！ 飲もう盛り上がりう」

サクちゃん 「（息苦しそうにせき込む）」

ローズ 「千歌大丈夫！？ ほらティッシュ」





ティッシュをもらい痰を吐き出すサクちゃん

サクちゃん 「ありがと」

ローズ 「千歌……それ」

サクちゃん 「え」

ローズ 「血」

全員がサクちゃんを見る。ローズ、ミヤザキ、モリバー立ち去る。音響がなくなる。

ミッチー 「探したんだよ。今日一時退院するって聞いてたから久しぶりに学校で会えるって思ったのに、卒業式の列にもいないから」

サクちゃん 「よくここだつてわかったね」

ミッチー 「……なんとなくここに在る気がしたんだ。いてほしくなかったけど」

サクちゃん 「ごめんね」

ミッチー 「靴履きなよ」

サクちゃん 「(首を横に振る)」

ミッチー 「……なんで。なんで千歌ちゃんが」

サクちゃん 「楽しかったから。今皆との思い出振り返っただけで、幸せになれるくらい楽しかったから」

ミッチー 「意味が分からないよ。なおさらなんでさ」

サクちゃん 「私の病氣」

ミッチー 「治るんでしょ？手術大丈夫なんだよね？」

サクちゃん 「うん。手術も大丈夫だし絶対治るって言われた。でも声出せなくなるんだって」

ミッチー 「え。声？」

サクちゃん 「声帯を取るんだって。私、もう一生歌えなくなるんだって」

ミッチー 「千歌ちゃんが一生歌えなくなる？」

「問題なく生きているんだから、嘆くことなんかはないはずなんだけどね。それでももう私の心は晴れないし、前向きになれないし、幸せになれない」

ミッチー 「そんなこと」

サクちゃん 「そんなことない?」

ミッチー 「……」

サクちゃん 「私ね、この先、この幸せなみんななどの思い出を憎むようになるかもしれない。それが嫌なの! だったら幸せなまま、幸せだった学校で全部終わりにしたい!」

ミッチー 「千歌ちゃん……」

サクちゃん 「その程度のことです自殺なんてって思う?」

ミッチー 「……」

ローズ、モリバー、ミヤザキが入ってくる。3人が入ってくる前に音響を操作。

モリバー 「ここにいた!」

ローズ 「千歌!」

ミヤザキ 「岡本!」

ミッチー 「……みんな」

ローズ 「……千歌。何してるの」

サクちゃん 「ごめんね」

サクちゃんに駆け寄ろうとするモリバーミヤザキローズ。

サクちゃん 「来ないでー!」

3人の足が止まる。

サクちゃん 「みんなのこと嫌いになりたくないの。好きなままでいたいんだ」

ミッチー 「……嫌いでいい。嫌いでいいよ! 憎んでいい! 千歌ちゃんに嫌われたって憎まれたって、生きていてくれるならそれだけで僕たちは幸せだ」

サクちゃん 「なんで! なんでわかってくれないの! みっちゃん!」



ミッチー 「好きだから！好きだからわかってあげたくないんだ」

サクちゃん 「わかんない！意味わかんない！」

サクちゃん 飛び降りようとする。サクちゃんを止めるミッチー。

サクちゃん 「放してよ！」

ミッチー 「放さない！」

ミッチー、サクちゃんを安全な方向へ突き飛ばし、共に尻もちをつく。

サクちゃん 「……じゃあさみっちゃうん。一緒に死んでくれる？」

ミッチー 「……いいよ。そんなの簡単すぎる。でも。僕は千歌ちゃんとみんなと一緒に生きていたい」

サクちゃん 「……」

「もうちょっと頑張ってみない？ダメだったらその時またここに来たらいい。……どうかな？」

サクちゃん 「……」

ローズ 「千歌……」

ミヤザキ 「ん？」

モリベー 「どうした？」

ミヤザキ 「聞こえないか？」

「旅立ちの日に」の伴奏が聞こえてくる。一番の終わりのあたりくらいから「H」。

ローズ 「旅立ちの日に」

モリベー 「体育館からか」

ローズ 「前向きになれる歌」

モリベー 「どんどん先に進むその最初の一步……」

ミヤザキ 「懐かしい友の声 ふとよみがえる」

ローズが加わり

ミヤ・ロー 「意味もないいさかいに泣いたあの時♪」

モリバーが加わる。

宮モ・ロ 「心通った嬉しさに抱き合った日よ♪」

「みんな過ぎたけれど 思い出強くだいて♪」

ミッチー、サクちゃんもそれぞれ合唱に加わっていく

5人 「勇気を翼に込めて 希望の風に乗る  
この広い大空に 夢を託して

今 別れの時 飛び立とう 未来信じて  
は ずむ 若い力 信じて

この広い この広い 大空に

今 別れの時 飛び立とう 未来信じて  
は ずむ 若い力 信じて

この広い この広い 大空に

今 別れの時 飛び立とう 未来信じて  
は ずむ 若い力 信じて

この広い この広い 大空に♪」

最後の伴奏で、お互い微笑みあい、5人近づき寄り添う形になる。伴奏が消えるとともにストップモーション。

ミヤザキ 「暗転。……そのまま終幕」



5人、まばらに拍手をする。

ローズ 「みんなお疲れ様」

モリバー 「お疲れ。皆、出し切ったなあ…」

ミヤザキ 「ああ。いい芝居だった」

ミッチー 「うん。最高の最初の一步だ」

サクちゃん 「……千歌はね、私の分身なんだ。きっと今日の千歌は、これから前をみて歩いて行けるんだと思う」

ミッチー 「僕もそう思う」

サクちゃん 「……みんな！卒業おめでとう！」

ローズ 「おめでとう」

モリバー 「おめでとう！」

ミヤザキ 「おめでとう」

ミッチー 「おめでとう」

5人、軽く笑いあう。

モリバー 「すげースッキリした」

ミヤザキ 「お、もうこんな時間か。俺そろそろ始発で出ないと」

サクちゃん 「そっか」

ローズ 「アタシも仕入れに行かなきゃ。ブロリンともお別れだね、アタシの最初の旦那さん」

サクちゃん 「それ素敵だね」

モリバー 「今度は大事にしてくれる男見つけろよ」

ローズ 「モリバーに言われたくないよ」

モリバー 「うっせ」

サクちゃん 「あれ、ブロリンってさ。結局ものすごくローズのこと愛してたんじゃない？」

モリバー 「そんな設定あったか？」

サクちゃん 「あった、あった。ねえミヤザキ君」

ミヤザキ君 「ああ。宝物はどんなでも食っちゃうんだが、ローズの写真だけは大切すぎて食べることができず、服の下に肌身離さずって設定だった」

サクちゃん 「そうそう。ローズをチュリップが連れ帰ったあと、ブロリンは写真見ながらひっそり涙を流すって」

ローズ 「いい男じゃんブロリン。惚れてやってもいいぜ？」

5人 「はははは」

ミッチー 「ああああ！」

サクちゃん 「どうしたの？びっくりしたあ」

ミッチー 「川セン」

モリバー 「え？」

ミッチー 「記憶はぼんやりなんだけど川センも何か入れてなかった？タイムカプセル」

サクちゃん 「あ。入れてたかも」

モリバー 「え、でもブロリンの中にはもう何も」

ミッチー 「いや、だから」

モリバー 「……服の下？」

ミヤザキ 「脱がせろ」

ローズ 「ほんとだ！あつたー！あつたよー！」

モリバー 「おおおお！すげえ！」

サクちゃん 「何が入ってた？」

ローズ 「写真！集合写真」

5人集まって、写真を眺める

モリバー 「集合写真ちゃんと撮ってたんだな」

ミッチー 「川センやるなあ」

サクちゃん 「頭あがないねエ。ほんと敵わない」

ローズ 「今頃笑ってるかもね」

モリバー 「写真の俺たち、揃いも揃ってアホ面してやがんな」



ミヤザキ 「これ。全国が終わった後の写真じゃないか」

ミッチー 「……なーんだ。笑ってるんじゃない」

モリバー 「あーアホらし」

ミヤザキ 「どうする？ この写真、サクちゃん持って帰るか？」

サクちゃん 「え？ 私？」

ローズ 「サクちゃんしくないでしょ」

ミッチー 「そっだよ」

サクちゃん 「そっかありがとう。でもいいや、これはここにあった方がいい気がする。（息を吸い）ブロリン大王、民が大事しているとうわ

この宝でございます。どうぞお納めください。」

ブロリンのベルトに写真を差し込み、また服を閉じる。

サクちゃん 「ラストカリフラワーでした」

ミヤザキ 「ありがとな」

サクちゃん 「ええ、急にどうしたの」

ミヤザキ 「いや別に。じゃあ俺はこれで」

モリバー 「おう、またな」

ミヤザキ 「ああ。またな」

ミヤザキ かつこよくポーズを決め、微笑み、部室を後にする

ローズ 「ミヤザキ。最後の最後にかっこつけていったね」

モリバー 「かっこつけてたか？ あれ」

ミッチー 「僕は好きだよ」

サクちゃん 「ミヤザキ君らしいね」

ローズ 「じゃあアタシもそろそろ」

ミッチー 「そっか」

ローズ 「ちゃんと野菜も食べなよ、ミッチー」

ミッチー 「買いに行くよ」

ローズ 「サクちゃん、またね」

サクちゃん 「またね」

ローズ 「うん。モリバー、またな」

モリバー 「おう、またな」

ローズ、部屋から出ていく

モリバー 「あいつのお芝居もつかいみてみたいんだけどなあ」

サクちゃん 「それ言ってあげたらいいのに」

モリバー 「嫌だよ。恥ずかしい」

ミッチー 「ま、またいつか見えるんじゃない？」

サクちゃん 「私もそんな気がする」

モリバー 「よしっじゃあ俺も。帰って寝るか」

ミッチー 「お疲れ」

モリバー 「また連絡するよ。サクちゃんも」

ミッチー 「うん」

サクちゃん 「こっちからもするよ」

モリバー 「じゃ。あばよ」

モリバー、部屋から出ていく

サクちゃん 「モリバー行っちゃうと寂しくなるね」

ミッチー 「騒がしいから、あいつ」

サクちゃん 「じゃあ。私たちもそろそろ行く？」

ミッチー 「そうだね」





ミッチー、部室から出ていこうとする

サクちゃん 「ミッチー、その服で出ていくの?」

ミッチー 「あ。忘れてた、稽古着だったー」

サクちゃん 「忘れてたんだ」

ミッチー 「だってすごく着心地に違和感なくて」

ホワイトボードの裏に隠れるミッチー、着替える

サクちゃん 「あのさ」

ミッチー 「うーん?」

サクちゃん 「あのセリフさ」

ミッチー 「どのセリフ?」

サクちゃん 「うれしかったよ?」

ミッチー 「え、いやだからどのセリフ?」

サクちゃん 「秘密」

ミッチー 「えーなにそれ」

ミッチー着替えて出てくる。警備員の姿

サクちゃん 「おっミッチー大人バージョンだ」

ミッチー 「ま、いいけどさ」

サクちゃん 「じゃいこっか」

ミッチー、稽古着のズボンに何かが入っていることに気が付く。  
ポケットから取り出してみると第二ボタン

ミッチー 「あっははっは」

サクちゃん 「え、なになに」

ミッチー 「秘密」

サクちゃん 「えー」

ミッチー 「これはブロリンにあげよう」

ブロリンに近づき、第二ボタンを服の下にしまう。

ミッチー 「またね、ブロリン」

サクちゃん 「ねー何入れたのー」

ミッチー 「だーかーら、秘密」

サクちゃん 「ま、いいけどさ」

ミッチー 部室から出ていく。サクちゃん部室をゆっくり見渡し

サクちゃん 「ありがとうーまたねーっ！」

サクちゃん、電気を消し、部室を出ていく。鍵が閉まる音。残される部室。  
エンディング曲が流れ、終幕。